

南紀漁村の年中行事

——三重県尾鷲市九鬼町の場合——

田 中 宣 一

はじめに

全国には各地各様の年中行事が営まれており、一見すると、錯綜した複雑なものとなっている。筆者はかつて、年間三百六十五日に雑然と配置されているかのごとき年中行事も、行事相互間の関わり方という観点からその構成原則を求めれば、一年を単位として継承・循環するということが、一年を両分し六ヶ月を隔てて対置するということが、まったく同じ行事が間歇的に繰り返されるといふことが、それぞれに、相互に特別な関係を持たずに孤立していることが、の四つになるのではないかと考えた。そして、

六ヵ月を隔てて対置する諸行事と孤立的に存在する諸行事がわが国全体の年中行事の骨格を構成しており、一方、継承・循環の原則を持つものと間歇的に繰り返される諸行事には各地でバリエーションがあり、全国を一単位とした場合、年中行事を複雑に見せているのは後者の諸行事の営まれ方にあるのではないかと考えた。⁽¹⁾ 幸いこの考えには好意的な評価もあり、⁽²⁾ 現在、修正するべきところは修正しながらもこれの補強に力を注いでいる。

その際、条件の異なる多くの土地の年中行事を詳細に分析してみる必要を感じている。右の仮説提示までの作業過程においても、各地の年中行事を相当例分析し比較したつもりではあるが、その時はあくまでも、全国の年中行事をトータルとして捉えた場合の構成原則を求めることが目的であった。今度は、その検証ということを念頭に置きながら、三重県尾鷲市九鬼町の年中行事について考えてみたい。

尾鷲市九鬼町の年中行事を取りあげたのには、いくつかの理由がある。⁽³⁾ 最大の理由は、ここが全国でもやや特異な地に属するのではないかと思つたからであり、平均的でない土地での年中行事の分析も必要だと考えたからである。やや特異だと考えた第一は、漁業を中心にした土地であり、現在では農業を本格的に営む家が多くなったくないという点である。もともと、過去には農家もわずかではあるが存在したし、また現在でも、漁業ではなく、林業や商業を営む家、戸主が役所や企業への勤めをする家も稀ならず存在し、漁業専一の土地とは言えない。しかし現在、農家はなく、漁業を中心にした土

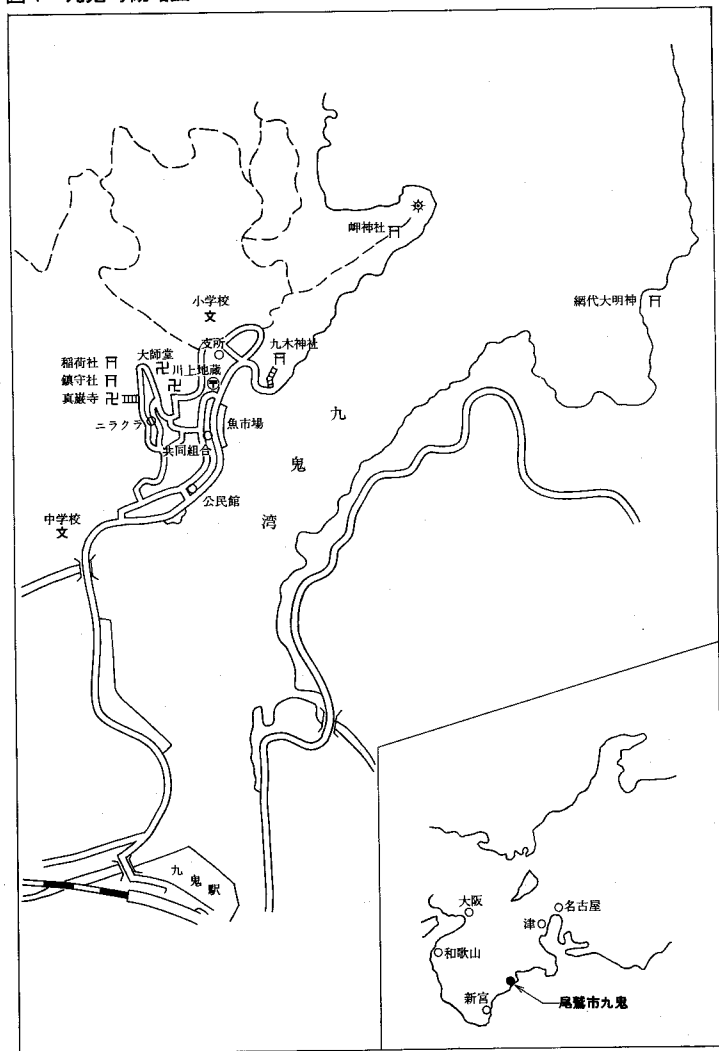
地であることは間違いない。わが国の村落は多少なりとも農業に依存しているが、現在その傾向がまったくなくないということは、やはり少数派に属する土地だと言えよう。第二は、現在、四百四十四という多数の世帯を有しているが、それが緊密なまとまりを持つ一つのムラとして機能しているのではないかと思われる点である。これだけ多くの世帯がムラとしての共同社会を形成している例は、やはり全国的にも例が少ないと言えよう。第三は第一・第二点とも関連するが、共有財産としての漁場と山林を所有し、その管理組織としての共同組合ともどうぐみあいが、社会組織や日常生活、各種行事に強大な影響力をおよぼしている点である。ムラが共有財産を持つてその管理主体となっている例は決して珍しくはないが、九鬼のように各家々に強い影響力を發揮している例は少ないのではないだろうか。その具体例については、次の「九鬼の概況」で述べたい。

九鬼の概況

(1) 地理・歴史

三重県尾鷲市九鬼町は、三重県の南部、紀伊半島東部にあり、熊野灘に面するリアス海岸の湾奥に立地している。深い海の背後には峻険な山なみが連なっており、その接するあたりに家が密集している。日本有数の多雨地帯に属するが、黒潮の影響で冬は比較的に温暖である。

図1 九鬼町概略図



中世の熊野海賊として知られる九鬼氏がここに本拠を持っていたことがあるとされているが、近世になると紀州徳川家に属し、紀伊国牟婁郡九木浦と称していた。廃藩置県後の明治四年に三重県に編入され、明治二十二年に町村制が施行されるや、九木浦は行野浦・早田浦と合併して三重県北牟婁郡九鬼村を成立させ、その一部となった(のち行野浦は分離)。昭和二十九年に、九鬼村を含む歴史的・地理的に深いつながりのある一町四村が合併して尾鷲市が誕生すると、九鬼村に属していた九木浦と早田浦は、それぞれ尾鷲市の九鬼町と早田町になった。したがって現在の九鬼町は、近世の九木浦をそのまま継承している自治組織なのである。名称は異なるがまったく同一地域を指しているので、時代に関係なく、小稿では九木浦・九鬼町ともに九鬼と呼ぶことにする。

(2) 交通

九鬼は湾奥の良港であるため、近世以来、熊野灘を航行する船の風待ち・日和待ちの浦として栄えていた。『紀伊統風土記』に「本国(紀伊国)三ノ大湊アリテ、是ゾソノ一ナリトイフ」と記されている。それだけに回船の利用も多くて賑わったらしく、船唄に「九木の港に錨はいらぬ、三味や太鼓で船つなぐ」と歌われているほどである。この華やかさは大正時代までは続いたらしく、その名残りを知る古老はまだ少なくない。明治から昭和の初期までは、大阪・名古屋間の大型巡航船の寄港地でもあった。一方、陸路はまったく不便で、近隣諸集落へ行くにも急峻な山越えの道を辿らざるをえな

表1 昭和35年～昭和60年九鬼の年齢構成の推移

		昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年
人口 (人)	総数	2,150	1,894	—	1,411	1,249	1,124
	0～14	696	442	—	257	205	145
	15～64	1,295	1,266	—	931	780	685
	65歳以上	159	186	—	223	264	294

(注) 尾鷲市企画財政課「昭和60年国勢調査(地区別集計概数)」より。

七〇
 かった。そのため、現在の尾鷲市の中心部へ出るには長い間巡航船
 を利用していたが、昭和三十二年一月に紀勢東線が九鬼駅まで延長
 され、さらに同三十四年七月に紀伊半島を半周する紀勢本線が全通
 して、国鉄によって中京・関西と直接結ばれ、不便さは一応解決さ
 れた。このように長らく陸の孤島ではあったが、海上交通により、
 諸物資や人の出入りは頻繁に行なわれ、文化的に孤立してはいな
 った。

(3) 人口・世帯数

昭和六十年実施の国勢調査によると、九鬼の世帯数は四百四十四、
 人口は千二百二十四である。⁽⁶⁾ 明治十七年には本籍戸百七十一⁽⁷⁾だ
 ったが、漸次増加し、明治四十四年には三百四十戸、昭和十六年には五百二
 十戸、昭和三十一年には五百六十九戸⁽⁸⁾となった。これは山林資源搬
 出のための労働者が定住したり、後述するような鰯漁の活況によっ
 て、来住者、分家独立者が増えたためと思われる。しかし近年は、
 山林・漁撈ともにかつてほどの好況は望めないため世帯数・人口と

もに減少⁽⁹⁾きみで、昭和五十五年の国勢調査に比べて、六十年度的場合には世帯数で二・八パーセント、人口で十パーセントの減となっている。また、表1で明らかのように人口は減少しつつ年齢構成は確実に上昇しており、いわゆる過疎化傾向にあると言えよう。

(4) 共同組合

九鬼には、他でいう町内会・自治会に代わるものとして、九木浦共同組合⁽¹⁰⁾(以下、共同組合と略す)という組織がある。その成立は明治中期で、某有力者が導入して利益を得ていた鰯大敷定置網の権利を九鬼全体のものとし、さらに入会山の管理・運営の目的をも兼ねて、成立させたのである。その後、表裏一体の組織として九木浦共同定置漁業組合と九木浦生産森林組合を発足させ(いずれも組合員は全員、共同組合員と重複する)、現在は前者に鰯大敷定置網(一号と二号がある)と夏の定置網の権利を貸与し、後者には山林を移転登記させ、それらからの収入で共同組合は運営されている。組合員は組合発足当時の九鬼の在住者で、その資格は複雑な株制度によって譲渡されている。鰯網が好況の時には収入は莫大なもので、組合員への歩合の支給も相当な額に上ったという。今でも九鬼の最大関心事は漁の好不況、とりわけ冬期間の鰯の好不況で、九鬼の大部分を占める共同組合員は、直接漁業には従事していなくても漁業に無縁の存在ではないと言えよう。

共同組合の役員は、組合長(一名)、理事(四)、監事(三)、総代(八)、組長(四)で、会合には、役員

会(組合長、理事、監事が出席)、総代会(組合長、理事、監事、総代、組長が出席)、総会(原則として組合員全員が出席)があつて、組合が運営されている。

現在、九鬼は一番組から四番組という四つの組に分かれている。この組が共同組合の組長四名を選出する母体であるが、組独自の行事や予算はなく、すべて共同組合を中心として、九鬼が一本にまとまっている。九木神社その他の諸祭礼、真巖寺を中心とする彼岸会・施餓鬼会、葬式、その他いろいろな行事やできごとは共同組合が主催するか、あるいはそれらに補助金を出している。その意味で、世帯数は四百四十四と多いが、九鬼は一つのムラだと考えられる。

(5) 社寺など

社寺には、九木神社、岬神社、稲荷社、鎮守社、網代大明神、複数の山神祠、真巖寺、複数の地藏堂、天理教会などがある。明治十七年段階では、八幡神社、国一神社、蛭子神社、津島神社、金刀比羅神社もあったが、明治後期の神社合祀によって九木神社に合祀された。九木神社の主祭神は菅原道真で、鎮守社も同様である。それについて、かつてある人に宮の谷に流れついた梅の古木で二体の菅原道真様を彫れという夢告があり、夢告によって彫った二体の神像を九木神社と鎮守社に一体ずつ納めたのだという伝承がある。真巖寺は曹洞寺の寺院で、本尊の薬師如来座像は三重県有形文化財に指定されている。最近移住してきた若干の家を除けば、九鬼はすべてこの真巖寺の檀家である。墓地は

寺の横手にまともっており、単墓制で、最近まで土葬であった。

公的な施設には鉄筋コンクリート三階建の共同組合の建物（これには漁業協同組合も入っている）のほか、尾鷲市役所の支所、小学校、中学校、公民館、消防署、郵便局、紀北信用金庫、九鬼駅などがあ
る。

(6) 生業

昭和六十年の国勢調査による九鬼の男子の産業別就業者数と構成比、および昭和三十五年以降の推移は、表2のとおりである。漁業への依存度が大きいことがわかるだろう。さらに製造業の多くは魚加工業、サービスマスターの多くは釣客相手のものであり、農業従事者は現在ゼロである。九鬼は漁村だと考える所以である。女子の場合は製造業従事者が最も多いが、これもほとんどが魚加工業関係である。九鬼の漁業は、明治中期までは、浦漁と言って湾内に回遊してきた魚を網で捕獲する方法がとられており、魚種は小鰹、鰹、サンマ（細魚さいいと呼ばれている）が主であった。⁽¹⁾江戸時代には鯨漁も行なわれていた。⁽¹²⁾しかし、明治中期に宮崎県の技術を学んで鰹大敷網を導入してから、事情は一変した。熊野灘に直面した外海に冬期間鰹大敷網を布設したところ、これが好漁場であったため、九鬼は大いに潤うことになったのである。現在、近接して一号網（十二月～五月）・二号網（十月～八月）を布設し、一号網を引きあげたあとに雑魚用の夏網（六月～十一月）が布設されている。鰹大敷網と夏網は共同組合が権

表2 九鬼の産業（大分類）別就業者数・構成比の推移（男子のみ）

	昭和30年		昭和35年		昭和40年		昭和45年		昭和50年		昭和55年		昭和60年	
	就業者数	構成比%	就業者数	構成比%	就業者数	構成比%	就業者数	構成比%	就業者数	構成比%	就業者数	構成比%	就業者数	構成比%
第1次産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
A. 農業	—	—	287	53.3	275	53.2	217	54.4	189	53.3	152	53.9	—	—
B. 林業	—	—	8	1.4	13	2.5	4	1.0	2	0.6	—	—	—	—
C. 漁業	—	—	38	7.1	35	6.8	23	5.8	20	5.7	16	5.7	16	5.7
			241	44.8	227	43.9	190	47.6	167	47.0	136	48.2	—	—
第2次産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
D. 鉱業	—	—	83	15.4	77	14.9	57	14.3	56	15.7	38	13.5	—	—
E. 建設業	—	—	34	6.3	33	6.4	40	10.0	26	7.3	19	6.7	2	0.7
F. 製造業	—	—	49	9.1	43	8.3	17	4.3	30	8.4	17	6.0	17	6.0
第3次産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
G. 電気、ガス、水道業	—	—	168	31.3	165	31.9	125	31.3	110	31.0	92	32.6	—	—
H. 運輸、通信業	—	—	31	5.8	34	6.6	1	0.3	18	5.1	1	0.4	1	0.4
I. 飲食店	—	—	55	10.3	57	11.0	16	4.0	37	10.4	7	2.5	7	2.5
J. 金融、保険業	—	—	9	1.7	7	1.4	3	0.8	5	1.4	3	1.1	3	1.1
K. 不動産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
L. サービス業	—	—	62	11.5	52	10.1	47	11.8	40	11.3	39	13.8	—	—
M. 公務	—	—	11	2.0	15	2.8	9	2.2	10	2.8	7	2.5	—	—
N. 分類不能の産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(注) 尾鷲市企画財政課『昭和60年国勢調査(地区別集計概数)』より。

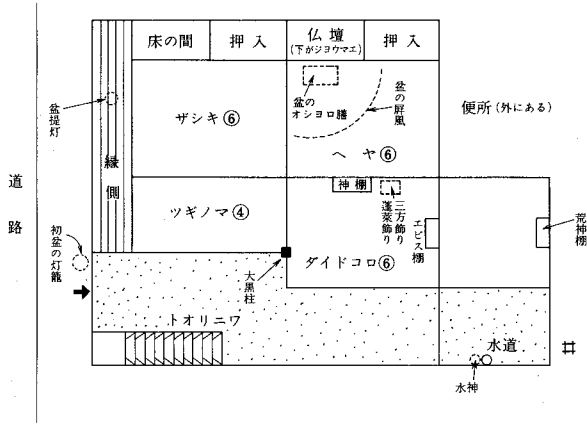
利を所有しているが、別に個人で湾内各所に八角網・エビ網などを布設したり、湾内外で一本釣も盛んに行なわれている。また、昭和三十五年ごろからハマチの養殖も行なわれ始め、現在、ハマチのほか鯛・鮮などが湾内各所で養殖され、名古屋方面をはじめ、東京・大阪の市場に出荷されている。

明治時代初期には、水田稲作や畑作農業(麦・粟)も細々と行なわれていたらしい。⁽¹³⁾ 水田を所有し農業を営む家は戦後しばらくまでは五、六軒あったが、もとより主生業たりえず、漁業の副次的なものであった。現在は水田は一枚もなく、自家用の野菜畑が山際に散在する程度である。林業従事者は表2でわかるとおり若干名いるが、太平洋戦争後しばらくまではなかなか盛んで、製材所もあり、外部から労働者として来ている人も多かった。

(7) 祭祀組織

頭屋組織の名残りが見られる九木神社の祭祀組織について触れておきたい。正月の祭礼神事は、九鬼を二分して相争う形で行なわれる。一方を遊谷配^{ゆやはい}、他方を里配^{さとはい}という。遊谷配・里配は、現在では祭祀組織にしか用いないが、共同組合によって九鬼が一体化される明治中期以前には、これらがムラの組織であり漁撈組織でもあったらしい。九鬼のだいたい東半分を遊谷地、西半分を里地と言ひ、元来それぞれの地を支配する役員名が遊谷配、里配であったが、その役員が支配した組織名になっている。現在、一番組と二番組が遊谷配に属し、三番組と四番組が里配に属している。そして、遊谷・里

図2 間取りと神仏



- (注) 1. 方位は道路への向かい方によって一定でない。
 2. ○内の数字は畳数。
 3. 神・仏のうち、実線で囲ったのは常設のもの、点線で囲ったのは正月もしくは盆のみに設けるもの。

ともに三人の配役が選ばれており、一般にそのうちの一人を村組と呼び、他の二人を配役と呼んでいる。この二人ずつの配役(計四人)は、一番組から四番組まで各組から一人ずつ選ばれ、この人の家が祭り前後(現在では四日夜)の各組の組宿になる。

右の配役のほかに遊谷配・里配ともに、四人ずつの禱屋(ちや)が選ばれる。禱屋にはそれぞれ大禱(正月禱)、三月禱、五月禱、霜月禱があり、毎年交替で、家順でつとめる。役割分担は、昭和四十年ごろまでは、正月のほか三月一日・五月一日・十一月一日に禱屋宅で行事をしたので、各月の禱屋はその時中心になったが、現在では正月しか行なわないので特に分担はなく、皆同じようにつとめている。以上は成人男子であるが、

このほか遊谷配・里配ともに、中学二年の男子からカギトリ(鍵取り)という役が一人ずつ選ばれる。鍵取りは二日から神社に籠って精進潔斎をし、祭礼当日(五日)には一人が前弓、もう一人が後弓となつて、的射の役を担当する。この前弓・後弓は、遊谷配・里配が一年交替でつとめる。

このように、現在は村組を含む配役三人と禱屋四人、鍵取り一人が、神官(禰宜と呼ばれる)とともに正月の一連の祭礼神事を担っているのである。これとは別に、伊勢神楽を伝える神楽保存会があつて彩りを添えている。正月以外の九木神社や岬神社の祭りには、神官が斎主になるのであり、配役は単なる参列者の一員でしかなく、禱屋・鍵取りは一切関与していない。

(8) 神棚・仏壇

各家々の間取りと神・仏の位置は、図2のとおりである。現在では、建替えたりトオリニワを廃した家も少なくないが、伝統的かつ標準的なものは、このようである。ただ、六畳間が八畳だったり逆に四畳半だったりというように、若干の広狭の差は見られる。建物の向きは入組んだ道路事情に左右されるため、家によってまちまちである。

神・仏の位置は、正月と盆の設けを同じ図に示したためややわかりにくい、常設のものは、神棚・エビス棚・荒神棚・仏壇と、屋外の便所神の棚である。水神や三方飾りは正月だけのものであり、仏壇前のオシヨロ膳・霊供膳や灯籠・提灯類は盆のみのものである。

年中行事例

ここで述べる行事日は、すべて太陽暦のものである。

(1) モンビと休み日

モンビ

モンビとは、大晦日、正月三ヶ日、一月の八鬼山荒神堂の祭り、節分、初午、三月節供、三月の岬神社の祭り、五月節供、七月の九木神社の祭り、盆、九月節供、九・十月の神送り・神迎え、十一月の山の神祭りなどを言う。詳細な行事内容は、(3)月ごとの行事の中で述べるが、この日には各家庭で、小豆飯・小ナマス・オカズという馳走を作って祝い、このうち小豆飯と小ナマスを神棚に供えている。小豆飯とは強飯ではなく、小豆を入れて炊いた飯である。小ナマスとは、酢でしめた魚と大根・人参で作った膾で、神に供えるのは味つけ前のものである。オカズとは、炙った魚、および昆布・人参・大根・里芋・牛蒡・椎茸等のうち五品ないし七品で作った煮メである。

節供祝いは宵祝いと言われ、モンビ当日ではなく、前夜に馳走をこしらえて祝う家が少なくない。休み日

鯛大敷網や夏網に従事する人の休み日は、次のようになっていた。網漁は、朝モチ・昼モチと言つて、毎日朝・昼二度網をあげに行くが、土曜日の昼モチは定休となる。このほか、十二月三十日(昼モチのみ休み)、大晦日、正月三ヶ日、一月四日(昼モチのみ休み)、一月五日、三月十八日、七月二十五日、盆が休みとなる。このうち、一月四日はその年の漁初めの日、一月五日は九木神社の正月祭り、三月十八日は岬神社の祭り、七月二十五日は九木神社の夏祭りである。別に、日和の悪い時は休みになる。

山仕事の休み日は、大晦日、正月三ヶ日、一月五日、一月七日、七月二十五日、盆、十一月七日である。このうち、一月七日と十一月七日は、山の神祭りの日である。別に、山主ごとに日曜日などの定休日設けられている。

(2) 毎月繰り返されるもの

火替えと供饌

火替えとは、クド(竈)の火を掻き出し、鍋底や茶釜の煤を払ってきれいにする事で、毎月一日の前夜に行なわれる。最近では行なう家が少なくなったが、かつてはどの家でも嚴重に行なっており、丁寧な家では、一日のほか十五日・二十五日の前夜にも行なっていた。火替えのあと、きれいになった竈や鍋を用いて、一日それに十五日・二十五日の早朝には小豆飯を炊き、神酒と一緒に神

棚に供えるのである。供饌の前には火替えが必須のことだったと思われるが、火替えは行なわれなくなっても、一日・十五日・二十五日に、小豆飯をこしらえて神棚に供える家はまだ多い。

右のほか、モンビにも火替えをする。さらには、漁の少ない時に漁を迎える意味で火替えが行なわれたり、女性の月忌みや死の忌みが明けた時にも、行なわれていた。

地藏講

九鬼には地藏がいくつか祀られているが、それらの中で、川上の地藏というのが最も古く、由緒あるものとされている。参る人は絶えないらしく、常に線香の煙やロウソクの火がゆらめいている。毎月二十四日夜には、この地藏の前の小さな堂に信者が集まり、般若心経を唱えて勤行が行なわれている。この時、米の粉の団子や菓子などいろいろなものが供えられ、勤行のあとそれらを分けあって食べ、四方山話に花を咲かせている。男性も参りには来るが、勤行に参加するのは女性(老若を問わず)のみである。特に、八月二十四日夜は地藏盆で、踊りが行なわれる。

大師講

川上地藏横の谷川少し上流に大師堂(じ)があり、堂内には、弘法大師を中心にして、左右に地藏と波切不動が祀られている。これらは真巖寺持である。

毎月二十日夜、ここに中年・初老の女性二十人ほどが集まって、大師講が行なわれている。この時には真巖寺の住職も参加し、皆で観音経をよみ、般若心経を繰り、最後に「南無大師遍照金剛」

と唱えたあと、住職の説経がある。説経をすませて住職が帰ると、皆で、「有難や高山の山の岩かげに大師は今におわします」という大師の念仏を唱え、終わると、各自お接待を受けながら四方山話をして解散する。お接待とは講の中心者川上つむ氏が供えた混ぜ飯のことで、参加者はそれらを分けあって食べるのである。講の参加者は米少々と金(三百円〜五百円)を持参するが、金は貯めておいて大師堂の修繕費などに充てられる。特に一月二十日の大師講は初大師と称し、勤行そのものは平素と変わらないが、各自が馳走を持ち寄ってお接待として供え、念仏のあと分けあって盛大に楽しむのである。

(3) 月ごとの行事

十二月十五日 正月飾りハヤシ

九鬼の正月準備は、この日から始まると言つてよい。正月飾りハヤシとは、禱屋に当たった人々(八人)が、暮の三十日に九木神社・岬神社・網代大明神・鎮守社・ニラクラに飾る松・榊・譲り葉・アセボ(馬酔木に似た木。馬酔木のことかもしれない)を共有地から採ってくることを言う。特に潔斎をして行くことはない。採ってきたものは、三十日まで水につけて清浄な場所に保存しておく。

十二月二十八日頃

この頃、各家々では掃除・煤払いや餅搗きが盛んに行なわれる。餅搗きの日として、特に二十九

日を避けることはないようである。

十二月三十日

禰屋が、九鬼の各所に正月飾りをする。この飾りは、十五日に採ってきた松・榊・譲り葉・アセボや裏白を束ね、それに掛けの魚(鱒など)二尾と、ゴキ(御器)と呼ばれる漏斗状の藁製の器をつけたもので、ゴキの中には小里芋(クロウデという小さな皮つきの芋)・餅・干柿・蜜柑などが入れられている。これを、遊谷配・里配のうち、その年の前弓に当たった方の禰屋が鎮守社とニラクラへ、後弓に当たった方が九木神社・岬神社・網代大明神へ、それぞれ飾りに行くのである。

右の禰屋による正月飾りがなされるころから、各家々や船への飾りも行なわれる(写真2、5、8参照)。家々の飾りは、玄関・神棚・エビス棚・荒神棚・水神(水道)・大黒柱と、屋外の便所になされる。玄関には、左右に松の小枝を半紙で包み紅白の水引きで束ねて飾り、中央に、橙・干柿・裏白などをつけた注連飾りが飾られる。他の所には、松・榊・譲り葉・アセボを束ねたものに掛けの魚をつけて飾られるが、特に神棚には、鯛(または鱒・ホウボウ)とクエマスが左右に一对ずつ腹合わせに飾られる。火神と大黒柱には、別に藁製のゴキが取りつけられ、その中に小里芋・餅・干柿・蜜柑などが入れられている。この飾りとは別に、玄関を除く右の各所には、丸い小餅が一重ね供えられる。さらに、三方の上に米を敷いて鏡餅を一重ね据え、周囲に伊勢海老・橙・串柿・小里芋を配した三方飾りが、ダイドコロ(炊事場ではなく居間に相当する所、図2参照)に飾られる。丁寧な家で

は、別に蓬萊飾りを設けている。仏壇の飾りには注連・松・榊・裏白は用いず、譲り葉とアセボを束ねたもののみで、小さな丸餅一重ねが供えられる。

大小の船にも神棚同様、松・榊・譲り葉・アセボを束ね、掛けの魚をつけたものが飾られる。鯛大敷網の船には、三十日の朝の漁が終了するとこれらの飾りが一斉になされる。また、船には大漁旗が立てられる。つややかな常緑樹の飾りをつけ、色とりどりの大小の大漁旗を翻らせて多くの船が繫留されている様子は、漁村の正月の華やかさの象徴のように思われる。

三十日の少し前から大晦日にかけて、どの家でも寺参り・墓参りをする。寺では先祖の位牌を拝み、玄関口・風呂場・便所に貼る護符をもらって帰る。かつてこれらの護符は、正月四日、住職が年頭の挨拶に廻る時に配られたものだが、現在では暮の寺参りの時に渡されている。門口への護符には、「奉転読大般若六百卷家内安全諸願如意吉利攸 善星皆来悪星退散 医王山真巖寺」という文字が記されている。門口の薄暗い板壁に貼られているもらったばかりの護符の白さは、注連飾りにつけられた温かみのある橙の色やみずみずしい松の緑とともに、年の改まった新鮮さを感じさせてくれる。一方、墓では、墓石に柄杓で水をかけ線香を立てて拜むが、この時、今まで供えてあった香の花を取り除いて新たに譲り葉とアセボを飾ってくる。自宅の墓だけでなく親戚のにも同様にするので、籠にたくさん譲り葉とアセボを入れて背負って来る人もあり、墓地は彼岸や盆と同じように賑わい、線香の煙につつまれる。そして、このあと正月十六日までは、一切寺と墓へは近づ

かないのである(正月十六日にはこの譲り葉とアセボを取り除き新たに香の花を供える)。

十二月三十一日 大晦日

午前中、大禱(正月禱)の家には、禱屋であることを示す幟が立てられる⁽¹⁶⁾。神楽宿にあてられる公民館には、神楽保存会の人々によって、それを示す幟や大行灯が立てられ、笹飾りがされる。これと並行して、ヒョウケンギョウの準備が進められる。ヒョウケンギョウとは法華経の訛った言葉、たとえ説かれているが、明らかではない。語源はとにかくとして、これは大晦日から元旦にかけて行なわれる火祭り、場所は、ニラク⁽¹⁷⁾という九鬼の中央部にある不思議な聖地で執り行なわれる。ヒョウケンギョウの行事は、大晦日夜の大火焚きおよび元旦午前中の灰・泥の中での相撲という二段階構成をとっているが、元来は一連のものだったのだろう。

ヒョウケンギョウで焚く薪は各家々から集められ、それは子供(男女)の仕事である。これをホタ集めと言う。かつては子供組のようなものがあり、遊谷配・里配別々に集めていたのだろうが、昭和五十九年の場合、遊谷配(一番組・二番組)各家を中学二年生、里配(三番組・四番組)各家を小学五年生が担当していた。二、三人が一グループになって、「モノモー(物申す)、ヒョウケンギョウを祝ってください」と言って、片端から軒並み歩く。そして各家々で薪少々と米・餅・金(百円)千円の間)をもらうと、「有難うございました。よいお年をお迎えてください」と礼を述べ、玄関口を出る時にまた、「マツギニコメコウ(松木に米乞うか)、^{ゼン}銭も^{カネ}金も持って、ダイダイ」と唱える。この挨拶・

礼状・唱え言は、定型化している。ホタ集めは昼ごろにはほぼ終了し、集めた薪はニラクラへ運び込まれ、夜の大火焚きに用いられる。米と餅は正月二日から神社に籠るカギトリ（籠取り）の食糧に充てられる。金は貯金して子供の修学旅行の費用に充てられる（だから現在小五と中二の子供がこの仕事を担当しているのである）。なお、子供が訪れても、ヒのかかっている家（一年以内に不幸のあった家）では物を出すのを遠慮している。

夜になると（午後六時三十分ごろから）、ニラクラと九木神社とに分かれて、二つの行事が並行して行なわれ、別に、神楽獅子舞いが、九木神社とニラクラを結ぶ形で練り歩く。ニラクラの方では子供が中心になり、父兄やPTA役員が手助けをして大火焚きが行なわれる。多くの人々が集まってくる。夜空を焦がす大火で身体をあぶるが、こうすると風邪をひかないと信じられている。獅子二頭と囃子方数人からなる神楽は、神楽宿を出て九木神社で神楽を奉納し、そのあとニラクラへと向かう。ニラクラではすでに大火焚きの真最中であるが、獅子のうち一頭はその火の傍に来て舞い（写真3）、神社から受けてきた御幣をニラクラの神に納める。そして宿に戻る。この頃が大火焚きのクライマックスで、あと徐々に火勢は弱まる。一方九木神社では、神楽が境内を出たあと、村組・配役・禰人（計十四人）と神官が、参拝・玉串奉奠をし、そのあと拝殿で直会・宴会が行なわれている。宴途中で霜月禰二人が座をはずし、小徳利を持って鎮守社（真巖寺横にある）へ供えに行く。その帰途、ニラクラに立寄って大火焚きの様子を見るのであるが、霜月禰が九木神社に戻ってくる

と最後の盃が廻り、一同「ツヤ」と唱えて盃を干してお開きとなる。そして神社を出、提灯の明かりを頼りに伊勢音頭を歌いながらニラクラへと向かう。もうこの頃にはニラクラの火は消えて、人影も少なくなっており、一同は火の始末を確認して解散するのである。

ニラクラにおけるヒョウケンギョウの火祭りも一段落する九時ごろから十二時までは、各家庭でテレビを見たりして、除夜の鐘を待っている。賑やかであった町内が一瞬の静けさを迎える時である。そして除夜の鐘を合図に、各家庭で若水迎えと初詣が行なわれる。

若水迎えは、かつては近くの井戸か谷川で行なったが、現在では軒下や屋内に設けられた水道で行なわれている。水道から若水迎えをするようになって、迎え方は古式を守っている家が少なくない。すなわち、戸主が紋付などの正装で提灯を持って水道の蛇口に向かい、十二トウという賽銭（百二十円くらい）を供えて新しい桶（ベケツ）、柄杓で水を汲む。この時、「あらたまの年の初めに杓とりて方の宝われは汲みとる」と三回唱える人もある。水道の蛇口には松・神・譲り葉・アセボ・掛け魚二尾と注連が飾られ、藁製のゴキがくくりつけられ、ゴキには餅・蜜柑等が供えられている。若水を迎えて屋内の台所などに入る時には「モノモー」と一声挨拶し、主婦が「ドール」と返答したあと、戸主が桶に汲んだ若水を持って入るのである。かつて戸外から若水を迎えて来、新春初めて屋内に入る時にこのような挨拶を交わしていたのが、屋内の水道で汲むようになった現在でも守られているのである。この若水は神棚・仏壇へ供えられ、朝、雑煮や初茶に用いられる。

若水迎えがすむと、新しい草履や下駄を履き、提灯を持って九木神社へ初詣に出かける。靴を履いたり懐中電灯を手に行っている人もあるが、古式を守る人は少なくなく、冷たく暗い夜にランコロンという下駄の乾いた声があちこちに響き、提灯のやわらかい明かりがゆれる。神社に着くと鳥居前の磯で潮水を汲み、少し身体を清めてから鳥居をくぐり参拝する。この時にも十二トウという賽銭(百二十円か千二百円を紙に包んだもの)をあげる。初詣の時には人に行き会っても決して声はかけず、黙って詣り、帰るものだとされている。竹筒などに潮水を汲んで帰り、屋内各所に神の枝で少しふりかける家もある。それから一たん床に入り、早朝起きて、雑煮の支度などにとりかかるのである。

一月一日 元旦

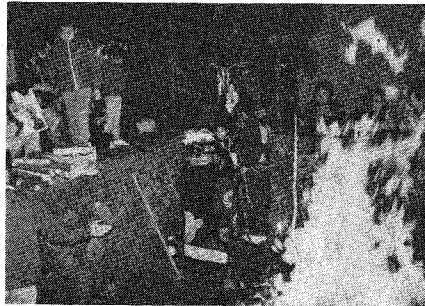
各家では早朝に起きて、すでに汲んである若水を用いて雑煮を作る。年男である戸主の仕事だとも言うが、あまりやかましくは言われない。雑煮には餅(丸餅)・大根・里芋・カマボコなどを入れる。これを家族一同で祝うのだが、その前に戸主によって屋内の神々への供饌が行なわれる。神々に供えるものは、小さく切った餅と生魚(鱒・サンマなどの切身)で、平素用いている神への器に盛って供え、それに新しい箸を添える。水神と大黒柱への飾りにはゴキがつけられているので、そこへも入れる。ただ、仏壇には家族のものと同じ雑煮を供える。夜にはすでに述べたモンビの供え物、すなわち小豆飯と小ナマスを神々に供え、水神・大黒柱のゴキに入れる。これら朝・晩の供饌は正



2. 正月の港の賑わい



1. 九鬼の一部。左手の森が九木神社
(真巖寺境内から)



3. ヒョウケンギョウ(大晦日の
火祭り)
ニラクラの中で獅子舞い
が行なわれる

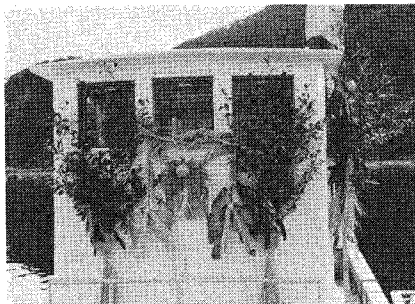


4. オコナイの時、禰人たちが
住職に牛王宝印を捺しても
らっているところ

南紀漁村の年中行事



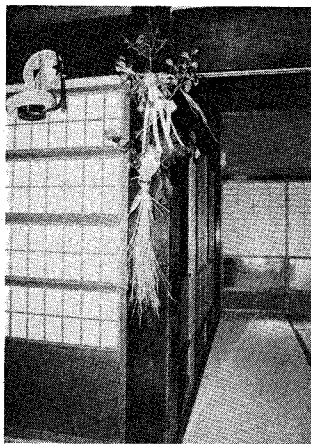
6. 正月の神棚の飾り



5. 船の正月飾り



8. 水神（水道）の正月飾り



7. 大黒柱の正月飾り

月三ヶ日間行なわれるが、先に供えたものは下げないで、その上に次々に供えつづけ、三ヶ日が終わるとまとめて取り下げる。少しずつ供えるとはいえ、三日分なので盛りあがるようになるが、冬期間であるため腐敗することはなく、取り下げたものは乾燥させて缶などに保存し、非常用の食糧として貯えるのだという家もある。なお、鶏肉(カシワ)は福をとり、こむと言って食べるが、正月にはなるべく四足動物の肉(牛・豚肉)は食べないようにしているという。

新春始めて(だいたい正月三ヶ日ぐらいの間)他家を訪れた時にはまず玄関先で「モノモー」と大声で呼び、それに家人が「ドーレ」と答える。そのあと、一般的な新年の挨拶を述べあうのが慣例で、この「モノモー」・「ドーレ」の声が元且には密集した家々のあちこちから聞こえてくる。

右は各家々の行事であるが、次にムラの行事について述べたい。これには船上神楽と、配役・禱人を中心にしたニラクラでの神事がある。

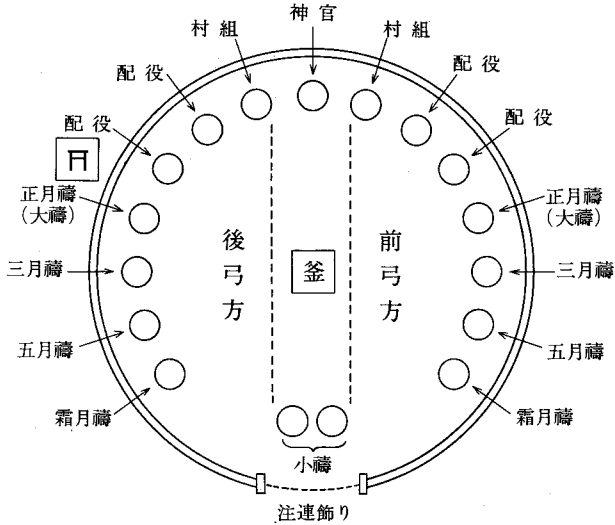
神楽の一行は、早晩に神楽宿を出、まず九木神社で獅子舞いを奉納したあと、獅大敷網の船に乗って再び舞う。囃子の音も賑やかに、まだ暗い中をそのまま湾外に出、獅大敷網を布設してある漁場に向かう。太平洋上熊野灘が白々とし始め、はるかな水平線から真赤な初日が顔を見せようとする頃、漁師によって網のミトグチ(魚の入る口)近くの海中に神酒が注がれ、船上では神楽保存会の人々によって激しく獅子が舞われる。獅網は一号・二号と二張あるので、最初に一号網の船で行かない、次に二号網の船に乗り移って行なわれるのである。正月飾りがなされ大漁旗のはためく船に

は、威勢よく多くの漁師や神楽保存会の若者が乗り込み、身を切るような寒さをものともせず、その船先の方で笛・太鼓に合わせて豊漁祈願の獅子舞いがめでたく舞われるのである。そのあと湾内に戻り、獅子を舞わせながら湾内を一周する。これらが船上神楽という行事であるが、かつては船上神楽の呼称はなく、単に、船で豊漁の獅子舞いをする、などと呼ばれていた。NHKテレビ出演が決まり、NHKの方で船上神楽と名づけて放映したために、九鬼においてもこの呼称が定着したのだという。

右の船上神楽が終わると、今度は港に繫留してある大小の船を一隻ずつ廻って祓いをし、笛・太鼓に合わせて獅子を舞わせ、御幣を与えて歩く。この時、船主は船にいて、一緒に祓ってもらう。船での神楽が一通り終わると、次には家廻りが行なわれ、各家の神棚の前で舞い、御幣を供えて歩く。家廻りは元旦一日だけではとても廻りきれないので三ヶ日間ぐらい続けられ、神楽による正月の網・船・家への祓いは完了するのである。

神楽が船や家々を祓い祝って歩いているのと並行して、大晦日に大火焚きをしたニラクラでは、午前十時ごろから多くの見物人を集めて一連の神事が進められる。執行者は村組を含めた配役と禰人たち(計十四人)、および神官である。ニラクラの中央では釜に湯が沸かされている。それらの座の位置は図3のようになっている。一同はニラクラの神に榊を捧げて拝礼したあと、直会の酒が三献めまで廻り、村組が「三国一の魚取り、取り初めた。云々」と謡を歌ってお開きとなる。最後に、

図3 ニラクラ内での上の祝い（元旦）の座順



配役・禱人たちはあらかじめ準備しておいた十二トウ（かつては十二銭だったというが現在では百二十円とか千二百円を半紙に包んだもの。この十二トウは九鬼でいろいろな機会に用いられる）を神主に向けて投げると、神主はこの包みを開けて、中の銭を見物人に撒き、皆争って拾う。

つづいて、ニラクラ内で、禱人たちによって両配對抗の形で相撲が行なわれるのだが、相撲といっても取っ組みあいをするのではなく、一種の泥のかけあいである。まず、前夜のヒョウケンギョウの大火焚きの残り灰、それに今日の釜で湯を沸かした灰や泥を潮水でこねて俵につめる。そして遊谷配・里配双方から正月禱が出て、相撲の仕切りをしたあと、その年前弓に当たった方の正月禱がこの俵を

高々と持ち上げて投げ落とすと、泥が飛び散って蹲踞の姿勢をとっている相手方にばさつとかかり、見物人は「やったやった」と喚声をあげてはやしたてるのである。今度はもう一方が同じようにして相手に泥をかける。正月禱につづいてこのようなことを霜月禱が出て再び行なったあとに、両配から子供が二人ずつ出、正月禱・霜月禱を含めた計八人が、ニラクラ内で入り乱れて額や身体に泥をかけあう。そして、灰・泥をつめた俵を引きずって海岸へ向かい、海に飛び込むのである。そこで一通り泥をとったあと、両配に分かれて五月禱の家へ行って風呂に入って身を清め、ニラクラを主舞台とした元旦の全神事は終了するのである。もうこの頃には正午に近くなっているが、この間九鬼中央部のニラクラ周辺は、威勢のよい掛け声や賑やかな笑い声につつまれ、正月のめでたさが漂っている。

ニラクラ中心の神事が終わると、午後、それに参加した人全部、すなわち村組を含めた配役、禱人、神官が共同組合の座敷に集まって盃事を行ない、宴を張るのである。

一月二日

各家々の行事は元旦と同様である。

九木神社の正月祭り(五日)の準備が、この日から始められ、カギトリ(鍵取り)の宮籠りが始まる。祭りの中心は、的射を行なって神意を伺おうとする弓神事にあると思われるが、射手はカギトリが担当し、中学生男子が遊谷配・里配から一人ずつ選ばれて、つとめる。別に、この日には、真巖寺

の住職によって村組・配役・禱人たちの額に牛王宝印を捺すオコナイという行事があり、これを捺された人々は、祭りが終わるまで精進潔斎の生活に入るのだとされている。

午前中、両配別々に、正月禱の家に禱人とカギトリが集まり、カギトリが入浴したあと一緒に食事をとる。献立は、小豆飯・小ナマス・オカズ(煮物)と刺身で、これらは各家庭でモンビに準備する馳走とほぼ同じものである。そのあと、共同組合に両配の禱人とカギトリが集まり、ここでカギトリは新しい禪を締め、丹前に着替え、鉢巻をし、新しい草履を履いて九木神社に向かう。神社へは神楽(獅子一と笛二)を先頭にし、カギトリは丹前の袖を持ち腕を張った形で歩いて入るが、この時、禱人たちは、的射に用いる弓・矢・刀をはじめ、潮水の入った壺や神酒などを持参する。神社に着いて神楽が籠り堂に幣入れしたあと、神楽や禱人たちは神社から出て、カギトリ二人だけが五日朝までの籠りに入るのである。とはいっても、森閑とした神社の籠り堂に中学生二人だけいるのを心配して、時々親は食事を持って訪れるし、夜には友だちが一緒に泊まることもある。昼には配役や禱人たちが来て的射の練習をつけるので、実際は隔離された生活をしつつけるわけではない。この間、カギトリは毎朝七時に浴衣姿で神殿に参り、海へ下りて裸になって潮垢離をとる。その時、藁を一本ずつくわえて行くのは、無言で潮垢離をとらねばならないことを示しているであろう。そして籠り堂に戻り、豆腐一丁を両手で揉んでこれで顔を洗うのである。

次に、夜、真巖寺で行なわれるオコナイについて述べよう。参加者は村組を含む配役と禱人全部

と住職である。まず、本堂に集まり、住職が大般若経を誦誦し、経本を参加者の頭上で開閉しながら、皆にただかせる。つづいて、一同は隣室に移る。隣室には秋葉大権現などの掛軸が掲げられているが、ここで住職は、一同に九鬼のなりたち・祭りのいわれを約三十分ほど語り、「医王山真巖寺鎮守縁起」を読み聞かせる。そのあと盃事になるが、寺という場所柄、小ナマスは用いず代わりに豆腐が用意され、またホウノという煎米を一つまみ食べたりする。盃事がお開きになると、住職によって参加者全員の額に牛王宝印が捺される（写真4）。これは、祭りが終わるまでそのままつけていなければならない、その間は、厳しい精進潔斎を守らなければならないのだと言われているが、風呂に入ったりするので、次の日まで残している人はほとんどいなかった。

正月十六日までムラ人は寺参りはしないことになっているのに、こともあろうに禰人たちが真巖寺での右のようなオコナイに参加するのはなぜであろうか。オコナイは伝承によると、本来は鎮守社で行なうべきものとされておられ、その鎮守社が真巖寺の隣にあつて現在小祠は真巖寺の管理下にある関係上、オコナイが寺で行なわれるようになったのだと思われる。

一月三日

各家々の行事は元旦と同様である。この日で屋内の神々への供饌は一応終わる（ただし、七日・十一日・十五日にはまた行なわれる）。そして、神棚へのオソナエ（小さな丸餅一重ね）はこの日で片づけられる。

九木神社では、カギトリの宮籠りが続いている。と同時に、午前中、社務所に村組・配役・禱人が集まり、盃事が行なわれる。また、禱人たちが境内にカギトリを連れ出して、弓神事の作法や的射の練習をつける。

九木神社での右の行事と並行して、子供によって各家々からの紙集めが行なわれる。これを担当するのは、元旦にニラクラで相撲をとった子供四人であり、各家々の神棚のオソナエの下に敷いた紙をもらい歩くのである。

一月四日

かつては、真巖寺の住職が赤い衣を着、「真巖寺ネットウ(年頭)！」と大声で叫びながら、家々を一軒一軒廻り、門口で年頭の挨拶をして帰った。この時、護符を持って来たが、各家ではそれを門口に貼りつけて魔除けとする。なお、住職が年頭の挨拶に来る前に、オジュウやオトソなど神への供え物を下げてしまいうようにしている家が多い。

最近では、この挨拶廻りがなくなった。そのかわり、暮に寺参りして先祖の位牌に供え物や供花をする時に、寺で護符をもらい受けて来、門口に貼るようになっていた。

漁始めの日。共同組合の鰯大敷網の船も出漁するが、初網のことはオタノミとも言われている。この時、鰯漁の船に乗った人には共同組合の方から赤い襷が贈られるが、赤味すなわち鰯が豊漁であるようにとの願いだと言われている。

九木神社の正月祭りを翌日に控え、組宿の飾りつけ、禱人たちの盃事、祭りの各準備、それに神楽の練りが行なわれる。

組宿の飾りつけとは、今夜の宵宮と明日の正月祭りを控えて、一番組から四番組までの組宿の飾りを完了することで、昭和五十九年の場合には、三日に一番組と四番組、この日(四日)に二番組と三番組の飾りつけを行なった。

盃事は、午前中、共同組合において行なわれ、出席者は村組を含む配役・禱人(これらは大晦日から何回か行なわれた盃事やオコナイの出席メンバーでもある)のほか、共同組合の組合長・理事である。両配のうち、その年に前弓に当たった方の村組の合図で全員に酒が注がれ、初献のみで(その他の時の盃事は三献まで)最後に全員で「ツヤ」と唱え、飲み乾して終了する。

祭りの準備とは、的編み、弓飾り、オゴク(御供)作りで、午後、禱人たちによって行なわれる。的編みとは杉板を網代組みにして丸く切り、それに前日子供が集めた的紙を貼ったもので(直径五尺)、烏賊のスミで縁取りをしてから、墨汁で同心円が三重に描かれる。弓飾りとは、中央部に五色の色紙を重ねあわせた弓で、前弓・後弓ともに七本ずつ準備し、うち二本だけに弦を張る。加えて、矢も四本作る。オゴク作りとは、九木神社の籠り堂で赤飯をこしらえ、禱人が重箱に詰めて村組宅と共同組合へ持参し、残りを半紙に包んでオヒネリにすること。このオヒネリは三百個ほど用意し、宵宮に神社に参った人に配るのである。

神楽の練りに先だつて、午後、中学生以下の女子の手踊りが、魚市場前の広い通りで行なわれ
る。

神楽の練りは、空ネリ・ネリ迎え・本ネリと三段階になっており、午後六時ごろから始まる。空
ネリは、神楽宿から出た天狗・獅子(二頭)・笛が屋台と一緒にざつと町内を一巡して元へ戻ること
である。ネリ迎えとは、再び神楽宿から出て一番組から四番組までの各番宿および禰人宅を順々に
訪れ、それら各所から町内の人々や村組・配役・禰人を誘い出すことで、誘い出された人々は、そ
のまま神楽の後について町内を練るかっこうになる。そして四番組の組宿まで行き終わると(すな
わち全部を誘い出し終わると)、本ネリに変わり、九木神社へ向かうのである。練りの列は、神楽・村
組・配役・禰人・ネリ人・共同組合役員・各村組と決まっているようだが、皆、お神酒が入ってし
まっているので、列は乱れてしまっている。ネリ人は主として青年がつとめ、顔に化粧をしたり、
祈大々漁という字やいろいろな絵を描き、いちように酔って騒ぎ散らしている。囃子の音も威勢よ
く響き、練りに参加している人も見物人も一体になって町内が興奮状態に包まれ、巻き込まれると
危ないので女性と子供は家の中から見ているほどである。そして神社に到着すると鳥居前で伊勢音
頭を歌う。その間に、獅子一頭が神社の籠り堂に行つてカギトリの前で舞うと、カギトリは太鼓を
連打し、獅子が神社から下がる。同時に人々は鳥居をくぐつて神社に参拝し、カギトリからオヒネ
リにしたオゴクをもらつて帰るのである。もうこの時は、夜中の十二時ごろになっている。オゴク

を食べるとその年は無病息災だと言われ、家族少しずつ分けあって食べ、残りは家の神棚に供えておく。

一月五日 九木神社の正月祭り

早朝、宮籠りしているカギトリが、最後の潮垢離をとる。

昼前後に、町の通りでは、組ごとの手踊りや仮装大会が行なわれる。

一方、禱人たちは、神楽の迎えを受けて神社に参る。神社では、籠り堂の前で獅子舞いが行なわれ、一同カギトリを伴って神社から出てくる。そして、鳥居の下まで来ると、カギトリの履いていた草履の鼻緒を三月禱がカミソリで切り、カミソリと一緒に海中に投げ捨てる。そして懐に持っていた新しい草履を履かせる。そのまま一同は共同組合へ向かい、最後の盃事を行なう。この出席者は、村組・配役・禱人・神官・共同組合役員、それに初めて矢取りが参加する。矢取りとは的射の時に矢を取る役の者で、一歳ほどの男子が担当し、頭には鳥の羽をつけている。まだ幼児なので後見役としての矢取り守がつく。

ここでの盃事が終わると、一同は弓神事の諸道具を持ち、神楽に先導されて真巖寺へと向かう。この境内で弓神事が行なわれるのであるが、これは寺の境内で行なうという考えではなく、寺の支配下にある鎮守社の境内で弓神事をするという解釈がなされ、この場所は臨時にハマと呼ばれている。この時だけは、寺の境内が祭りの庭に変わるのである。

午後二時三十分ごろから、大勢の見物客に囲まれて弓神事が始まる。カギトリ二人が並んで的に向かい、まず前年前弓に当たった方が射、つづいて後弓が射る。これを二回繰り返し、矢取りなどが矢を取りに行く。次に後弓・前弓の順で同じく二回繰り返し、再び矢を取りに行く。この時、カギトリは弓を持ったまま射場を対角線上に歩き、配役から渡された籤を落とすのだが、この動作は三回繰り返される。籤というのは、かつて獲った魚を商人に樽で渡していた時に、数を間違えないために籤で数えたことを意味しているのだと解されている。それからまた、前弓・後弓の順で二度ずつ弓を射、射場を対角線上に歩き、籤をもらい、落とす。先と同じくこれを三回繰り返すのだが、前弓が配役から最後の一本の籤をもらうとすぐに配役が扇を広げて「マッタ」と声をかけ、配役の「朝日を受けて、ニワの海、一号・二号・夏網の、海の大々漁……」の祝詞がある。祝詞の内容からもわかるとおり、九木神社のこの正月祭りは、現在では鯛の豊漁祭りとの性格づけがなされているのである。祝詞のあと、カギトリがマッタをかけられた最後の籤を落とす。後弓に対しても、最後の籤に同じことがなされる。以上のことがさらに何度か繰り返され、矢がうまく的中すると縁起がよいと言って見物人は、どよめき、配役の「マッタ」のタイミングがうまいといつては喚声や拍手がなされ、紙吹雪が舞い、賑やかなものである。その間、カギトリが禰人に支えられながら鎮守社へ神酒を注ぎに行ったりもする。終わると、村組・配役・禰人・カギトリ・矢取り（矢取り守も）が列席し、寺の本堂で盃事（一献のみ）がある。境内では、的は毀され、見物人が競つて的板に的紙を

巻きつけて持ち帰る（これを神棚に供えておく）。まだ見物人の残っているところで、獅子（一頭）が舞う。以上の弓神事は約一時間半にわたって行なわれる。

本堂での盃事が終わると、再び神楽を先頭に共同組合に戻り、お神酒をいただく。そのあと、星祭りと呼ばれる神楽宿へ向かい、神楽保存会の招待で盃事をする。この時には、共同組合長はもちろん、小・中学校長や郵便局長、その他九鬼の各団体長も招かれる。

かつては右の祭りが終わるとすぐに、九鬼の家々全部（ただし共同組合員の家のみ）に、禱屋の座敷に坐ってくださいと連絡が行く。すると各家（ただしヒのかかっている家は行かない）では共同組合に、塩蔵した魚をもらいに行つた。この世話は禱屋の人たちがするのであるが、モロ鱈一尾に他の魚をつけて計二尾、それに小ナマス・洗米を配ってくれるのである。これをもらつてくるとすぐに神棚に供え、下げてから家族揃って食べたのである。モロ鱈が次第に獲れなくなり、一時、代わりにサシマを用いたこともあったが、近年廃止になってしまった。

一月六日

各番組ごとに組宿に集まり、祭りの勘定が行なわれ、宴となる。この時に、かつては、後述するような伊勢神宮への代参者が決められた。

一月六日 六日年越

各家々では夜、翌朝の粥に入れる七草を叩く。その作法は家によって多少は異なるが、だいたい

は、神棚の下(神棚は高い所にあるのでその下)にカシオケ(米をとぐ桶)を据え、その上にキリバン(組板)を置いて、火箸・火吹き竹・ナベツカミ・デンキ(搗粉木のこと)・十能・荒神簀などを並べ、これらでセリ・ナズナなどの七草を叩くというものである。その時、「トウドの鳥は、あっちへ行つてバタバタ、こっちへ行つてバタバタ」などと唱え、叩いた七草はそのまま、神棚の下の方に供えておく。なお、七草叩きに用いる火箸・火吹き竹以下の諸道具は、みなクド(竈)に使うもので、クドメツツイと総称されている。

一月七日 七草・山の神祭り

朝、前夜に叩いて神に供えておいた七草に、切餅と米とを入れた粥(七草粥)を作って神に供え、家族一同で食べる。

この粥は水神に供えるとの心持ちで水道・井戸などにも供え、そのあと水道・井戸などの正月飾りはずすのである。

また、この日は山の神の祭りの日である。初山の神と言い、山仕事をする人が、関係する山の神祠に参つて神酒を供え、魚などの供物をする。この日山へ入ると怪我をするといふので、山仕事は休みになる。山主などが参加して山の神講が行なわれる。

山の神の祭りは十一月七日にも行なわれ、こちらの方がはるかに盛大なので、山の神およびその祭りについては十一月七日の項に記したい。

一月十一日

この日を鏡開きとも、倉開き・ジョウマエ(鏡前)開きとも言う。倉やジョウマエに供えてある鏡餅を下ろし、これを入れたゼンザイを作って神に供え、家族一同で食べる。ジョウマエとは仏壇の下の場所にあり(図2参照)、この日までここの金庫は開けないのだとされている。

一月十五日

小豆粥を作る。これは、米・小豆のほか三方に入れて神に供えておいた鏡餅の碎片を入れて作る。この小豆粥は神棚・仏壇・荒神などに供えたあと、家族も食べる。この日、神棚・門口などに張っておいたすべてのオシメ(注連縄)・松飾りはずす。ダイドコロの三方飾りや蓬菜盆も片づけられ、大黒柱にしてあった正月飾りもはずされる。仏壇の飾りも同様である。

正月飾りは、すでに述べたように三日・七日・十一日など、場所によって少しずつ取りはずすが、この十五日には完全に全部片づけてしまう。したがって、九鬼では十五日までが松の内だと考えられているのである。

なお、寒月と言い、十五日の小豆粥を作るころに小豆を沢山炊いて乾しておき、それを一年間とっておいて小豆飯を炊く時には入れるという家もある。モンビの時の小豆飯に用いるのである。一月十五日まで

日は定まっていないが、とにかく松の内までにしてしまわなければならないことがいくつかある。

その代表が、伊勢神宮への代参と、還暦と米寿の年祝いである。

伊勢神宮への代参は、実際には、五日(かつては八日)の九木神社正月大祭が終わってから十五日までの間に行く。一泊二日で、費用は共同組合で負担している。

昭和三十五年ごろまではなかなか盛大で、毎年三十数名の人が出かけた。祭りが終わった翌日の九日に各組ごとに集まって祭りの勘定をしたが、その時、各組ごとに伊勢コウというクジをひいて当たった人(この人をも伊勢コウと呼んでいる)各組五人(計二十人)と、配役(計二人)、村組(計四人)、それに神楽保存会の会員(若干名)、共同組合の職員(若干名)が参りに行ったのである。このほか自己負担で何名かの希望者が同行することもあった。出発前には内宮・外宮に奉納する神酒と鱒・鯛を用意してから代表者(主として配役)が九木神社に参り、そのあと、皆揃って出発した。国鉄紀勢線が九鬼駅へ開通するまでは、巡航船で尾鷲まで出、そこから汽車で行った。すでに、船や汽車の中で持参した神酒と称する酒を相当飲んでしまうので、伊勢に着いた時には皆よい機嫌になり、笛を吹き、伊勢音頭を歌いながら、まず外宮へ、次に内宮へと参拝したのである。そして一泊し、神札を受けて帰り、皆に配る。神札は各家の神棚に祀られるのである。その際、親戚・近所の家へは、赤福や生姜糖という菓子類を土産として添えて配ることが多かった。帰着後、共同組合の二階で、参拝者一同と共同組合の役員などが揃って、ゲコウオミキ(下向お神酒)として簡単な飲食をともにした。

現在では、配役二人が九鬼全体を代表して参拝し、大漁祈願をし、神札を受けてくる。

還曆を迎えた人は、元旦に揃って九木神社に参り、松の内までに旅行に出かけたりする。

米寿の祝いは、松の内までとは言うが多くの場合正月二日に行なってしまう。祝いかたは、米寿の人が赤頭巾をかぶり、子・孫・親戚の人々と一緒に一本の紐につかまりながら、九木神社に参拝する。家に戻ってからは、座敷に坐り、それら祝ってくれる人々に神酒を差しあげ、祝いの膳を囲むというものである。同時に、半紙に手判を捺して名前と八十八歳という字を書いたもの、および竹を五寸ぐらいの長さに切って中に小豆を入れ両端を赤紙でふさいだもの、紅白の丸餅などを配る。

一月十六日

この日は仏事関係の行ない始めのようになっていいる。寺参り・墓参りもこの日に初めて行なう。

正月始めに仏様(仏壇の先祖の位牌)に供えておいたもの一切を下げる。そして、供えておいた餅を入れた汁粉を作り、再び仏様に供える。

コハナ(樺)の立て始めの日でもある。十五日に神棚などのオシメを取りはずすと、すぐに山へコハナを採りに行き、この日それを持って寺参りをし、初めて墓参りもする。この時、暮の三十日ごろから正月十五日まで墓に供えてあつた譲り葉とアセボと取りはずし、再び墓にコハナを供えてくる。

この日から葬式をしてもよいことになっている。一日から十五日までの間は、死者が出て絶対的に葬式は出せず、死者を茶毘にだけふしておいて、この日以降に葬式をするのである(なお、正月一番初めに女性が亡くなったら、その年は死人が多いと言われている)。

一月二十日 初大師

(2) 毎月繰り返されるものの中の、大師講で述べたとおりである。

一月二十八日 八鬼山荒神堂の祭り

九鬼の西北にある八鬼山(海拔六二七メートル)には、神仏混淆の寺・荒神堂があり、その神は、火の神・漁の神として周辺の多くの地で信仰されている。一月二十八日の祭りにはハナゴマンジュウなども売られ、多くの参拝者がある。

九鬼では、この日、鯛大敷組合の一号網・二号網ともに責任者(網頭)が参拝して鯛を奉納し、大漁祈願をしている。一般漁師でも、参拝に行く人は少なくない。漁師以外でも参りに行き、神札を受けてきて各家の竈近くの荒神祠に祀っている。またかつては、小さい子供は一度はここへ参らせろべきだと言い、子供が生まれると背負って参りに行く人も多かった。

なお、この神は戦さの神だとも言われ、太平洋戦争中には、随時個人や隣組単位で戦勝祈願に行き、籠ることも行なわれた。

二月三日 節分

朝、柵の短い枝葉に鯛の頭を突きさし、それを家の各入口にさす。これを鬼の目突きと言う。

夕方には、豆撒きをする。まず、大豆と米を炒り、これを少し紙に包んで赤飯や神酒と一緒に神棚に供えたあと、夕方になると、戸主が残りの炒り豆と炒り米を仏壇の下の方（ここをジョウマエと言ふ）へ、「福は内、福は内、福は内」と三回繰り返しながら撒き、そのあと、玄関から外へ向かって、「鬼は外、鬼は外、鬼は外」と三回繰り返しながら撒くのである。そして、撒き終わると玄関の戸をピシャリと閉める。外へ撒く際には、炒り豆に小石を加える家があったり、玄関の戸は閉めたまま、内から戸にぶちつけるようにして撒く家があるなど、家によって多少の違いはあるが、ほとんどの家で現在でも福を呼び込み邪鬼を追い払おうとして、朝の鬼の目突きと、夕方の豆撒きが行なわれている。

神棚に供えた大豆は、あとで下ろして初雷の時に食べると雷の害をまぬがれると信じられている。二月初午 厄落とし

厄年とは、男二十五歳と四十二歳、女十九歳と三十三歳で、数え年でしている。この厄年に当たる男女、特に四十二歳の男と三十三歳の女は、二月初午とその前日に次のような厄落としの行事をする。現在でもそうだが、かつては人によっては相当派手に行なったので、公民館主導の生活改善運動の一環として自粛が呼びかけられた。しかし、現在でも完全に自粛されているわけではない。

厄年の人は、初午前日の夕方、ヨミヤと言って一人ずつ提灯をつけて九木神社に参り、十二トウ

(十二銭というが現在は百二十円か千二百円)という賽銭をあげる。この時途中で提灯の明かりが消える
と縁起がよくないとか、他の厄年の人と一緒に話をしてはいけないとか言われている。一
人ずつで行くべきで、何人かが一緒に行くと勝ち負けができてよくないとも言う。賽銭をあげたあ
と、九木神社からすぐに真巖寺に参りに行くが、その途次、ヨスジマチと言われる四辻の所で(現在
の田崎酒店の前)、金包みを年の数だけ背後に向けて撒く。これによって悪い厄を落としてしまうの
だと信じられており、子供や近所の女の人が待っていて競って拾って帰る。人によってはヨスジマ
チの所でだけでなく、神社から寺への道筋のいたる所で撒いたりもする。真巖寺では、本堂で手を
合わせ、神社と同じ十二トウという賽銭をあげて帰るだけで、お経をあげてもらったりはしない。
寺の横の鎮守社と呼ばれている祠へも参る。家によっては(裕福な家では)、さらに帰ってから家の
前で、金を枓に入れておいて撒く場合もある。このように相当の額の金を撒くので出費もなかなか
たいへんなようであるが、前もって計算に入れてあるのでどうということはないのだと言う人もい
る。また、かつては寿司や汁粉を作って親戚へ配ったり、厄年の家へ、親戚・近所の人が訪れて酒
を飲んだり赤飯を食べたりしたという。飲み食いは現在でも少しは行なわれているが、かつてほど
の仰々しさはないようである。なお、還暦や米寿とは異なり、厄年の家へは祝い品は持参しないの
が普通である。

初午当日には、再び九木神社へ参り(もうこの時には厄年の者同士連れだって行っても話をしてもよいよ

うである)、もらった人形ひとがたに姓名・年齢を書いて納める。神官(禰宜)が、これを祈禱し破いをしてから海に流してくれる。そのあと、寺へも参る。厄年の家へは、神楽が来て舞ってられる。最近は、撒く金を少なくして厄年の者同士旅行に出たり、学校などへ寄附をすることもある。

三月一日

昭和四十年ごろまでは、遊谷配・里配別々に、村組を含む配役と禰人たちが三月禰の家に集まって盃事をし、大漁祈願をしていた。この時、三月禰の家には幟が立てられた。

三月三日 三月節供

女兒の節供で、数日前から雛人形を飾っておく。初節供の家へは親戚が人形を一品ずつ贈るが、段飾りは、すでに大正時代にはあつたという。人形を祝ってくれた家へは、チラシ寿司などをこしらえて節供の日にお返しとして持参したが、今は品物を返す家が多くなつた。

雛人形には、菱餅、キンチャク餅、アラレなどを作って供え、同時に神仏にも供える。菱餅は、赤・青・白の普通の餅を菱形に切つて三段に重ね、その上にシンコ餅をのせたものである。シンコ餅は米の粉を蒸し、ヨゴミ(蓬のこと)を入れて搗いたもの。キンチャク餅とは、米の粉を湯で練つて蒸して搗き、中に餡を入れたもの。キンチャク餅は菊の花の形などいろいろな形にこしらえるので、別に花餅とも言われている。このキンチャク餅は五月や九月の節供にも作られる。雛人形には桃の花も供えるが、貝類を特に供えることはないようである。

節供祝いは、また、宵祝い・宵節供とも言われ、三月二日の夜に赤飯と五色の小ナマスを作って供える。五色の小ナマスとは、フノリ・ワカメ・ワケギ・大根・人参・魚等々のうち五品を用いたナマスのこと。

雛人形を遅くまで飾っておくと女兒の縁がおそい(婚期が遅れる)ということ、早々と四日には片づけてしまふ。

三月十八日 岬神社大祭

九木神社裏手の岬の尖端に、岬さまと呼ばれる岬神社が祀られている。ここは九鬼湾口の高台にあたり、出漁する船がこの下を通る時には、責任者が船上からこの神を拝み、「ツヤ」と唱えて神に向けて海中に神酒を注ぐし、漁から戻る時には、小魚を一对(二尾)、船中から投げ供えている(魚は海中に落ちてしまふが)。岬神社は、このように漁師にとっては常に豊漁と海上安全を祈る神であり、この神社の祭りは、共同組合の主催で九鬼全体の行事として行なわれている。

当日、午前十時から岬神社で祭典が行なわれる。神官が祓ったあと、共同組合長以下参列者が玉串奉奠をする。当然、村組、配役も参列している。鰯大敷網など各船の責任者が大漁旗を神社に供えて祈禱してもらふ。そのあと籠り堂で共同組合・定置網組合の役員、村組、配役など主だった参列者が、直会としてオミキをする(古くは宵宮からの夜籠りもあったらしい)。

一方、近くの広場(公園)では、福引や婦人会主催の野立てなどの催し物が行なわれ、人々を集め

て賑わっている。福引の景品には鯛一本とか半分とかも出されている。かつては福引ではなく、バザーが催され、手踊りなども行なわれたという。

各家々ではこの日をモンビと考え、小豆飯・小ナマスを作って神棚に供え、オカズも用意して祝う。

三月中旬 春彼岸

彼岸には、入り・中日・明けの三回、寺参り・墓参りをする。入りの日には墓掃除をして墓に花を供え、中日にも明けにもまた参る。寺参りの時には、米の粉の団子を位牌堂の先祖の位牌に供える。中日には特にアンモノ（オハギ）を供える家が多い。

中日の午前中には、真巖寺で、半年ごとにとまとめて各家々合同の年忌供養が行なわれる。その彼岸以前半年間に年忌を迎えた家の人が寺に集まり、檀家総代が世話役になって各家々の先祖の供養をするのであるが、費用は各施主も負担するが共同組合でも出してくれる。かつては各家ごとに命日に年忌供養をしていたが、馳走や引出物が派手になる一方だったので、共同組合が中心になって寺で行なう合同の供養にきりかえた。しかし、それでも丁寧な家では中日に行なう合同の供養とは別に、その前夜を逮夜と称して、親戚を招き住職に頼んで読経をしてもらい、派手やかさはなかなかなくなっていない。また、参った親戚の人々に共同組合からまとめて砂糖を出していたが、引出物も再び各家々で配ることが多くなった。それも初めは饅頭五箇とかいうように控えめな品物が多

かったが、次第に砂糖・油・茶などになり、彼岸に合同で年忌供養をし始めた当初の生活改善の意
味は薄れがちだという。

彼岸の特に中日には、各家ともオハギを作り、ご飯と一緒に霊供膳に載せて仏壇の先祖に供える
(同じ物を寺の位牌にも供える)。また米の粉の団子も一緒に供える。この団子は一般の家はコロコロ
団子であるが、その半年に年忌にあたった家では、積み団子(三角に積みあげたもの)にして供える。
これら供え物は今では中日のみにする家が多くなったが、二十年ほど前までは彼岸の間中、毎日供
えていた。

四月八日 卯月八日

この日をオツキョウカと言う。真巖寺では、本堂の前に小さな堂を出して釈迦の誕生仏を据え、
その堂を花で飾る。同時に、寺では甘茶を作って出し、参りに来た人はその甘茶を誕生仏に注ぐ。
甘茶は持ち帰って家の仏へも供えるのであるが、その甘茶で墨をすって、「虫」という字を書いて
入口に逆さに貼っておくと、家の中にムカデが入らないと言われ、かつてはよく行なわれた。この
紙を便所に貼っておくと、虫があがってこないとも言われていた。

四月二十五日 招魂祭大祭

西南の役以来の戦死者の忠魂碑が、九木神社裏手の三思ヶ丘公園に祀られており、これを中心と
した招魂祭が行なわれている。

二十四日の宵宮は九木神社で行なわれ、神官、共同組合役員らが出席する。二十五日の本祭りには、忠魂碑前において、神官、共同組合役員らが出席し、遺族を招待して執行される。遺族らには、紅白の餅、とら巻という地元の菓子、弁当などが贈られる。このあと、余興として、相撲、小・中学校の運動会、映画の会などの催し物をしたこともある。名古屋の熱田神宮から舞楽を招いたこともある。遺族も年老いた現在、三思ヶ丘公園は遠いというので、最近では本祭りを中学校で執り行なうようになっている。

なお、昭和三十年ごろまでは、九鬼村の出費で行なっていたが、その後共同組合の経費でまかうようになり、現在にいたっている。この大祭には村組、配役は関係しない。

四月吉日 浦祈禱

四月か五月の吉日を選んで、その午前中に、九鬼湾内で、豊漁を祈願して浦祈禱が行なわれる。その年にとった魚の供養も兼ねているという。漁業協同組合の役員が中心になって行なう行事である。

数日前に、漁協の人が浜の平たい小石百八箇をきれいに洗って真巖寺へ持って行くと、住職が石一箇ずつに般若心経の文字を表裏に一字ずつ書いて、祈禱してくれる。当日は、住職と漁協の役員が、その石を持って船に乗り、太鼓を叩きながら湾内を一周し、湾入口の中鼻という岬近くに祀られている網代大明神(八大龍王を祀る)へ参りに行く。その間、船中では住職が般若心経を唱え、般

若心経の書かれた石を湾内各所に沈め、そこに酒を注ぐ。沈める場所は八角網やエビ網などを張る場所の近くであるが、特にいわれがあるわけではない。網代大明神に着くと船から降りて神酒、アソコ餅を供え、住職が般若心経を唱える。そのあと、皆で神酒をいただいて、再び湾内を一周して戻ってくるのである。

かつては、この日は漁を休み、各家でアソコ餅を作って祝った。

なお、十年ほど前までは共同組合主催の行事であったが、純粹に漁のことだからというので、現在では漁協主催の行事になっている。共同組合主催の時には、住職と一緒に組合の役員、村組、配役らが乗り込んだ。

五月一日

三月一日と同じことが、五月禱の家で行なわれた。

五月五日 五月節供

男児の節供とされ、初節供の家では、親戚から武者人形や兜を祝ってもらう。その返しとして、寿司を配ったり、砂糖、小豆などを配る。寿司とは押し寿司のことで、箱の中の下の方に菜の葉を敷いて飯を詰め、その上にレンコン・カンピョウ・人参・酢にした魚などをのせて、上から幾晩も押ししておき、それを切ったもの。今は、お返しといっても品物(器類)が多い。男児のいる家では鯉幟を立てる。鯉幟は、初節供に親戚で祝ってくれたりもするが、必ずしもそうとは限らず、自家で

買う家が多い。かつては鯉幟の竿に幟もつけた。幟には鍾馗の絵が描かれており、その絵の横へ家紋のついた菱形の衣きれをつけておく。また衣きれを猿の形に切つて、幟の下に五ツぶらさげておく。

五月節供として、男児の有無にかかわらず各家ごとに五月三日から五日にかけて行なわれることを、順を追つて述べれば、次のようになる。

三日の夕方、各家では粽を作り、四日朝早く起きて、その粽を五箇、端の方を縛つた形にして神仏に供える。粽は米の粉を練つて砂糖を入れて蒸し、笹の葉で巻いたもの。今では店で買う家もふえたが、かつてはこの家でも作つていたという。なお、粽を茹でた汁を杓ですくつて家の周囲にまくと、クチナ(蛇)が入つて来ないと言ひ、粽を作れば今でもまく家がある。粽のほかオサスリというものも作つて、四日に神仏に供える。オサスリとは、サンキラ(山帰来)の葉(トゲがありハート形のもの)のことであるが、米の粉を練つて中にアンを入れて蒸し、オサスリの葉に包んだ菓子のごとでもある。これは五箇とは限らず、たくさん神仏に供える。また、家によってはキンチャク餅も作る。キンチャク餅については三月節供を参照。

四日夕方には、菖蒲湯に入る。そして菖蒲で身体を撫でると丈夫になると言つたり、菖蒲を頭に巻くと頭痛が治ると言われている。湯に入れた菖蒲は、あとでどこへでも捨て、決まった処理法はない。

五日朝には、菖蒲湯を飲む。そして、前日に神に供えたチマキやオサスリを下ろして食べる。

七月二日 半夏生

わずかばかりでも農作業をする家で行なう行事で、炒りソラ豆、コウズキ、アラレを仏壇に供える(神棚には何も供えないようである)。コウズキとは、小麦を炒って粉にひき、黒砂糖を加えて湯で練ったもの。

半夏生は鎌・鍬の休みの日とされ、畑仕事には出ない。

また、半夏生を過ぎないと泳ぐものではないとも言われている。

七月七日 七夕

子供らが、笹竹に願いごとを記した短冊を吊り下げて門口などに飾り、星祭りをする。太平洋戦争前にはあまりしなかつた行事で、小学校や幼稚園の行事が徐々に広まったものらしい。

七月二十日 土用丑の日

ハッコベなどの薬草を採る日だとされ、採った薬草は陰干ししておく。ハッコベは膀胱の薬だといわれ、煎じて飲む。

七月二十五日 九木神社例祭

二十四日夜、九木神社において、神官、共同組合の役員、村組、配役、各種漁業団体の役員(漁協組合長や定置網の理事長など)、九鬼の関係諸団体の長(小・中学校長、郵便局長、婦人会長など)等が集まって、宵祭りが執行される。一般の人の参拝もある。同時に余興として、奉納花火大会やカラオ

ケ大会が行なわれる。昭和三十年ごろまでの一時期、大敷網の船に神体の一部を移し、船を豆電球で飾って湾内を一周したこともあったという。

二十五日には、午前中に九木神社において祭典を行なう。参列者や祭典の行ない方は宵祭りと同じである。同時に、余興として、子供の黒ん坊大会やプールにおいて西瓜とり競争などが行なわれている。太平洋戦争前には、この余興の一つとして、青年たちによる船漕ぎ競争が行なわれた。漁船のテントウ船に二丁櫓をつけ(三丁櫓をつけたこともある)、青年が二、三人乗り込んで、数ハイの船が神社から一斉に現在の駅に向かってスタートし、往復してくるというものであった。湾側では人々が手に汗をにぎって応援し、一等には米一俵とか酒三升などの賞品の出たこともあった。大敷網の大きな船に八丁櫓ぐらいをつけて競漕したこともあるが、これは長続きしなかった。戦後は行なわれていない。

八月一日

この日から盆に入るのだと考えられており、真巖寺の境内には八月一日から八月二十日まで仏旗が掲げられる¹⁸⁾。仏旗が翻っている期日は、葬式を出すことはできないことになっている。事実、筆者が訪れた時不幸にして死者が出たが、早朝、遺体は人目につかないようにそそくさと二トン車で火葬場へ運ばれて茶毘にふされただけで、葬儀らしきものは一切営まれず、仏旗が降ろされてから行なうとのことであった。

この日から七日盆までの間に、老人会の手のあいた人などが頼まれて、墓地の土手の草刈りや墓地入口の六地藏や万霊塔などの掃除をする。同時に、各家々では、墓磨きをする。磨き砂・石鹼などを使い、タワシで墓石をこしごし洗うのであるから、盆の期間中に墓地に行ってみると墓石はいずれもきれいで、苔むしたものや泥のついたものは見当たらない。この墓石磨きの時に、墓石前の竹筒で作った花立ても新しいのと取り替える。また、同じ日に仏壇の掃除も行なわれる。

八月七日

寺参りと墓参りをし、墓にはコハナ(香の花。檜のこと)を供えてくる。寺では本尊にも詣でるが、この寺参りは本堂内にある先祖の位牌に参るのが大きな目的である。

新盆(初盆)の家ではこの日に、先祖迎えの設けを行なう。具体的には、仏壇に供え物をし、門口に葉つきの杉の木の灯籠を掲げ、窓口にキリコ灯籠を吊し(写真9)、仏壇の前に廻り灯籠を並べることである。仏壇への供え物の中心は、餡の入った饅頭(アコヤという)と米の粉で作った団子で、霊供膳にのせて供える。葉つきの杉の木の灯籠とは、長さ五メートルぐらいの葉つきの杉の木(これは他人の山のを伐つてきても大目に見られる)に小さな木の灯籠を吊したもので、この灯籠は葬儀屋で作ってもらう。キリコ灯籠も葬儀屋で作ってもらう。廻り灯籠は絵模様をついたきれいなもので、葬儀に用いたものをこの日のために保存しておく。各種灯籠には夜になると電気が灯される。以上の設けはこの日から二十日盆まで続けられ、二十日盆が終わるとはずして、杉の木の灯籠と廻り灯

籠は次の盆まで家で保管し、キリコ灯籠だけ寺で預ってもらう家が多い。

二年めの盆も、新盆と同じ設けをする(三回忌が終わるまで同じ設けということ)。ただし、この場合は十二日からで、十二日になると預けておいたキリコ灯籠を寺からもらってき、他の灯籠と一緒に所定の場所に設置する。そして一般の家々が盆を終いにすると同じように二年めの盆の家でも十五日夜に片づけ、海に流してしまふ(最近ではゴミ集めの車が持って行ってくれる)。

真巖寺本堂正面には施餓鬼棚が組まれる。供養の対象として、棚には次のような位牌が並べられる(順不同)。

○九木浦第一鱒大敷網 九木浦第二鱒大敷網 九木浦夏敷網

○当山万人講諸精霊

○九鬼家先祖代々霊位

○檀家各家先祖累代霊位

○三界万霊等

○(新仏の戒名の連記されたもの)

八月十二日

十日ごろからこの日までに再び寺参りをし、米・金のほか、高野豆腐・海苔・ソウメンなど思いの品物を、重箱に入れたり盆に載せたりして持参する。これは寺に祀られている先祖の位牌に



10. ホッカイシヨウロウ



9. 初盆の家の杉の木の灯籠
キリコ灯籠と盆提灯も見える

対して、住職が命日ごとに供養してくれるお礼だ⁽¹⁹⁾と解されている。

同時に墓にも参り、七日盆に供えたコハナを取り除き、新たにコハナ・ミズハギ(ミノハギ)を供え、線香をあげる。そのため、夕方ごろには、墓地は線香の煙で朦々となる。コハナ・ミズハギはかつては自由に山から採ってきていたが、最近では少なくなってきたので買う人が多⁽²⁰⁾い。そのため盆近くなると小商店の軒下にバケツに入れてたくさん売られていたり、行商に来る人がおり、路地のあちこちにはコハナやミズハギを抱えて行き交う人の姿が見られる。

八月十三日

各家とも、本格的な盆の設けに取りかかる。まず、仏壇を開け、前の畳の上に莫座を敷き、それらを囲むように屏風をめぐるさせる。仏壇に

は、小さい笹か盆に盛って西瓜・ナンバ（トウモロコシのこと）・ササゲ・酸漿・大豆・小豆などの畑作物を供える。竹の杖も供える。かつては仏壇の前方に細い青竹を渡して、ササゲや干菓子（落雁など）などを吊す家もあったという。

縁側か窓際には、家紋（紋の色は赤と黒）のついた盆提灯を吊し、夜には明かりを入れる。この盆提灯はどの家でも二十日盆まで吊しておく。なお余談になるが、夜になって漁村特有の狭い路地を行くと、開け放った暗い縁側にはこの提灯がぼうつと灯され、仏壇近くの奥の部屋からは帰省した子や孫を囲んでの賑やかな談笑がもれてき、なかなかよい雰囲気である。

墓参りはするが、オシヨロ（先祖）迎えの明瞭な行動はとられない。ただ、盆の設けをすっかり終えると、早速に風呂を沸かし、風呂場に新しいタオルと石鹼を用意して、「道中ご苦労さまでした。どうぞ足をおすすぎください。汗を流してください」などと言いなから湯をかきまわし、洗い場に何度か湯を流したあと、オシヨロを仏壇に迎えるという気持ですぐ仏壇に参る家が稀ならずあるのは、興味深いことである。

オシヨロへの供え物は、十五日の夜まで、毎日朝・昼・晩と準備されるが、その第一回めがこの日の昼（実は午前中）の供え物である。米の粉で小さな団子をたくさんこしらえ、仏壇に供えられるのがこれで、オチツキダangoと呼ばれている。オチツキダangoを供えることを、ムカエ御飯とかオチツキ膳と言う人もいる。また、この米の粉の団子は、ピラミッド状に積み上げて供える場合には

ツミダango、ばらばらのまま器に入れて供える場合にはコロコロダangoと呼ばれている。

夕方(実は午後早く)の供え物は小豆飯・酢の物・オカズで(これらはモンビ一般の馳走である)、芋殻で作った箸が添えられる。小豆飯は、梗米に小豆を入れて炊いたもの。酢の物の具は、大根と胡瓜である。オカズとは煮メのことで、各家の具を見せてもらうと、油揚げ・高野豆腐・昆布はほぼ共通して入っているが、あとは人参・筍・椎茸・カボチャなど思い思いのもので、具の数は五種類である。芋殻の箸(最近では割箸を用いる家も増えている)は、ショウロバシとも呼ばれ、あとで、十五日夜の送り団子をこの箸の両端につけて海へ流すのに用いる。上記の物を霊供膳(霊供膳にはお茶も供えられる)とショウロ膳とに載せて供える。霊供膳は漆塗りの立派な膳で、仏壇の中に据えられる。中と言っても狭い仏壇には入らないので、仏壇の抽斗を前に出し、そこに板を渡して載せている家が多い。ショウロ膳は白木の膳で(膳というより白木の板に脚をつけたような簡単なもの)、仏壇前方に据えられ、この上には何人分(何霊分?)かのものが供えられる。霊供膳は、命日など何かにつけて用いられるが、ショウロ膳は盆の時にしか用いない。以上の供え物をしてから、寺で営まれる施餓鬼会に出かけるので、この時の供え物の膳はセガキ膳と総称されてもいる。

夜食(実は夕方)の供え物は家によって異なるが、だいたいソウメンや西瓜である。これを供える時に、すでに供えてある霊供膳、ショウロ膳の物を下げ、その一人分(一霊分)を、ホッカインョウロを祀ると言って、必ず玄関口に供える。

ホツカイシヨウロとは、海で亡くなった人だと説明する人もいるが、祀り手のない無縁霊のことだとされている。これへの供え物をしないと、家のシヨウロ(先祖)が食べ物をとられてしまうと云われている。特に棚は設けず、竹筒の花立てにコハナ・ミズハギをさして玄関口に置き、そこへ、仏壇に新しい供え物をするたびごとに前に供えておいた物を下げ、簡単な器に入れて供える(写真10)。十五日の夜までつつけるが、器の中は取り換えずに次々に入れつけ、十五日の夜、まとめて海へ流すのである。

初盆の家では、右に述べたことのほか、新しいシヨウロの供養のために、十三日から十五日の間に、百八タイ供養と、念仏の婆さんの訪れ、住職の棚経がなされる。百八タイとは、玄関口に百八本のロウソクを立て、初盆の供養に訪れてくれた人に仏壇に参つて帰る時にこのロウソクに一人一本ずつ火を点してもらうことで、毎日百八本を燃やし尽くし、次の日には新しいのと取り換えることである。燃え残ったロウソクは、十五日夜のシヨウロ送りの時に流す。初盆の家へは、「○○さんも初盆になったなあ、早かったなあ、まいらしてえ(お参りさせてくださいの意)」と言って訪れるが、親戚でなくても心やすい人は必ず訪れるので、百八本はたちまちにして灯されてしまう。念仏の婆さん⁽²⁰⁾の訪れとは、念仏の婆さんと呼ばれる人が二三人のグループで訪れ、仏壇前で西国三十三番を唱えてくれることである。住職の棚経は説明するまでもないだろう。なお、初盆の家には七日盆以来、各種の灯籠が飾られていることはすでに述べたとおりである。

一方、真巖寺では、午後、施餓鬼供養が行なわれ、ムラ人は参りに訪れるが、この日のはかつての九鬼家の先祖供養のために行なわれるのだと、寺側では説明している。ムラ人もそれは承知している。かつては、施餓鬼の前に、寺の本堂で子供たちが扇子で互いに叩きあったり、読経の最中に施餓鬼棚に飾られた多くの紙の小旗を奪いあつたという。これは十四日・十五日の施餓鬼の場合にも同様で、奪つた旗は各自の家の墓へ供えた。

八月十四日

朝、各家ごとに墓前で火を焚く。松の木の脂の多い部分を長さ二十センチぐらいに細く切り、それを十本〜二十本燃やすので、これを松焚きと言う人もある。さらに午後にも、寺での施餓鬼から帰ると家の玄関口で火を焚く。

仏壇に迎えてあるショウロ(先祖)への供え物は、朝は粥と漬け物(菜の糠漬など)である。昼は牡丹餅で、家によつては茄子の揚げ物やスピタシ(ズイキを酢・塩・胡麻であえたもの)などを供える。夕方には、白飯にオカズ(オカズは十三日のと同じもの)もしくは天麩羅である。家によつては、麩のおつゆなども供える。夜食はソウメンまたは西瓜である。このように朝・昼・夕方・夜の食事と言つても、夕方のは午後早くというように、実際の時間の経過よりも相当早め早めに供え物はなされてゐる。これは、十三日や十五日においても同じである。ホッカイショウロにも供えることは、十三日のところで述べたとおりである。

夜になると、漁協前の広場(魚市場)で盆踊りが行なわれる。最初、民謡クラブの人々によって民謡踊りが踊られたあと、太鼓にあわせて有志が鈴木主税などの口説きをし、それにあわせて皆で踊るのである。口説きに対して子供がハヤシ(合いの手)を入れる。この盆踊りは同友会と称する青年会が主催する形で行なわれるが、実は初盆の家の人々が重要な役割を果すのである。

すなわち、盆踊りの時、初盆(二年め・二年めの盆の家)の家の人々が踊るとその家の仏の足が軽くなるのだと言われ、初盆の家の人々は家族総出で踊るべきだとされている。そのためにかつては紋付などハレの衣装で踊る人も多かったというが、現在ではそれほどでもない。青年は、女装したりいろいろな仮装をして踊ったが、現在でも鳥追笠などを被って踊る人は多い。また、口説きに対してハヤシを入れてくれる子供たちには、礼として初盆の家々で各々一万円を出している(この金は結局主催者である同友会の会計に入る)。このように、盆踊りは三回忌が終わるまでのショウロを供養する意味あいが強かったと思われる。事実、かつては、広場とは別にわざわざ初盆の家の前の路上で踊る人も稀にはいたらしい。以上の盆踊りは、十四日と十五日に行なわれ、特に十五日には深更まで踊り続けている。

一方、真巖寺では、午前十時から戦没者の追悼法要が営まれ、午後には施餓鬼供養が行なわれる。この日の施餓鬼は、一般檀家の先祖供養のために行なわれるのだと解されている。まず、共同組合長が挨拶したあと、共同組合長によってその一年間に真巖寺と九木神社へいろいろな物を寄附した

人の紹介と感謝状の授与があり、任職の読経にうつる。読経のあと、共同組合長・檀家総代・一般檀家の順で施餓鬼棚に参り、そのまま墓へも参って帰宅する。施餓鬼にはムラ人全部が訪れるわけではないが、初盆の家の人々は必ず参るべきだとされている。施餓鬼の時に、子供たちが扇子で叩きあつたり棚の旗を奪いあうのは、十三日と同様である。

八月十五日

朝と夕方との火焚きは、十四日と同じである。

仏壇への供え物は、朝は十四日と同じく、粥と漬け物である。昼には寿司または混ぜ飯。寿司は巻き寿司で、中には人参・カンピョウ・生姜・椎茸などが入っている。夕方には米の粉の団子を作つて井鉢一杯に供える(これを送り団子と言う)。アコヤという饅頭も供える。夜には小豆飯とタヌキ汁(油揚げを入れた味噌汁)、これらをホツカイショウロにも供えることは、十三・十四日と同じである。後述するようにこの日夜遅くショウロを送り出すが、送る前には十六日朝のご飯と称して、白飯と味噌汁・漬け物、それに担い団子を供える。担い団子とは、霊供膳やおシヨロ膳に添えた何本もの苧殻のショウロ箸の両端に、この日の午後供えた送り団子をそれぞれ一箇所ずつ刺したものである。これはショウロ送りの時に持参する。なお、担い団子に用いて残つたショウロ箸で身体具合の悪い場所を突つつき、この箸を夜のショウロ送りの時に海に流す。こうすると病氣や怪我の部分をショウロが持つて行つてくれるので、治ると言われている。

広場での盆踊りは、十四日よりもお賑やかに踊られ、深更にまでおよぶ。

一方、真巖寺では、十三・十四日と同じく施餓鬼が行なわれる。この日の施餓鬼は、万人講の諸精霊・三界万霊・魚族供養のために行なわれるのだと考えられている。

さて、以上のような行事が次々に営まれ、ついにこの日の深夜(十二時前後)、海岸で一斉にショウロ送りがなされる。夜の十一時ごろになると、仏壇へ供えた三度三度の食べ物や玄関口に置いたホッカイショウロへの供え物などを莫産につつま、担い団子を担ぐようにして持ちながら海岸へ行く。どの家でも、提灯に明かりをつけて持ち、戸主を先頭に家族が揃って出かけるのであるが、家の密集した狭い路地はひと時たいへんな賑わいになる。そして、家ごとに海岸の一角を占め、火を焚いてオショウロを送る気持で拜むのである。このショウロ送りは、まず一般の家が送った少しあとで、初盆・二年盆の家が行ない、この時住職による浜施餓鬼が営まれる。マイクを通した住職の読経の声が海岸全体に流れわたる中、暗い海岸線に点々とした小さな火の帯ができるさまは、なかなかのものである。そのあと家に戻って再び玄関口で火を焚き、すべての盆の行事は終了するのである。なお、海岸へ持って出た莫産や供え物、二年盆の家の杉の木の灯籠・キリコ灯籠・廻り灯籠等々は、かつては海へ流していたが、湾内をきれいに保つために最近では一ヶ所に集められ、トラックで焼却場へ運ばれる。

八月十六日

朝、各家々では墓地へ行き、供えてあったミズハギだけ抜いて(コハナはそのまま)墓参りし、家に戻ってから仏壇を閉じる。

午後、各家ごとに長い竹竿の先に松明をつけ、海に向けて燃やす。現在は海ではなく、近くの川(谷川)で焚く家が多いようである。

午後、共同組合の建物の中で、住職によって大般若の祈禱が行なわれ、集まった人々(女性や子供が多い)が百万遍念仏を唱えながら数珠練りする。そのあと、かつては寺から各檀家に団子が配られた。現在ではこれに代わって、大般若の祈禱に集まった人々に菓子配っている。

真巖寺では、年寄り有志が集まって念仏が唱えられる。

八月二十日 二十日盆

真巖寺境内の仏旗が降ろされ、初盆の家の各種灯籠と提灯、および一般の家々の盆提灯が片づけられる。

八月二十四日 地藏盆

川上の地藏では、地藏盆だと言って踊りが行なわれる。二十四日が地藏盆だと言われているが、実際には二十三日の夜にこの踊りをする。踊りに参加するのはほとんど中高年の女性と子供である。

旧暦八月一日 八朔

かつては何か行事があつたらしいとは言われるが、憶えている人を探すことはできなかった。た

だ、柿は八朔過ぎないと食べられないと言われている。

旧曆八月十五日 十五夜

夜、月の見える場所に机を出し、その上に月への供え物をする。供え物は、アコヤという餡を入れた米の粉の団子で、丸いまま供えたり、花の形にこしらえて供える。このアコヤとは別に、米の粉の団子を一五箇作って供える。この団子は丸い形のまま供えたり、里芋の形にして供えるが、里芋の形にしたものはラッキョの形にも見えるので、ラッキョダンゴなどとも言われる。団子のほかに、里芋を蒸して里芋の葉にのせて供えたりもする。以上のほかに、神酒・小豆飯・柿・栗なども供え、花壇にススキ・ハギ・ケンドなどの花をさして供える。なお、団子やアコヤは、床の間にも供える。

九月九日

節供で、小豆飯・小ナマスを神棚に供える。ヨメナを採って神棚に供える家もある。

九月十五日 敬老会

この日が敬老の日に定められてからのことである。七十五歳以上の年寄りを公民館に招いて、祝う。記念品が贈られ、婦人会の人々の馳走でもてなす。尾鷲市の主催であるが、共同組合も関与している。

秋彼岸

春彼岸と同じである。

九月二十四日 神送り

神々が出雲へ旅立つ日とされ、この日の夜、九木神社において神々を送り出すための夜籠り祭りがある(ただし実際に籠るわけではない)。神酒を供え、神官が祈りをしたあと、参列した共同組合役員、村組、配役、九鬼の関係諸団体の長(小・中学校長、郵便局長など)が、供えていた神酒を下げて飲みあう。共同組合の主催である。

各家では、神棚に祀つてある九木神社の神札に灯明を点して拝む家が多い。

九木神社の主神菅原道真は出雲において賄い方を勤めるので、一ヶ月早く旅立つのだという伝承がある。

十月初亥の日

わずかに農作業をする家々では、かつて初亥の日には亥の子のイモ餅と言つて餅を搗いて神仏に供え、家族一同で食べた。この餅は里芋・サツマ芋に糯米を混ぜて搗き、アンコをつけたもの。

この日は鎌・鍬の休みとも言われ、農作業を休む。もしこの日田畑へ行つて怪我をすると、一生治らないといわれていた。

十月二十四日 神迎え

九月二十四日の神送りと同様なことをし、出雲からの神の帰りを迎える。

旧曆九月十三日

十三夜だとは言うが、特に何もしない。

十一月七日 山の神の祭り

十一月七日にも山の神祭りが行なわれるが、十一月七日の方がはるかに盛大である。初山の神に対して、十一月の方を本山の神祭りと言う。

九鬼には山の神祠が八つある。人渡、田海道、宮の谷、奥地、笠松、大配、滝頭などにあり、多くは谷の入口の木がこんもり繁った所に祀られている。この日に山へ入ると怪我をするというので、山仕事をする人は仕事を休み、関係する山の神祠に参って神酒を供え、供物をする。この日には、ポタモチ(アンコロ餅のこと、オハギではない)を供えることになっている。山の神は女性だということで、戦後しばらくまでは、木で作った男根も供えていた。

これらの祠を中心にして、かつてはいくつもの山の神講があり、多くの人々が参加していたとい(2)うが、現在でも講として存続しているのは、宮の谷にある山の神祠を中心にしたもの一つになっている。この講には、現在、山主など八名が加入しており(太平洋戦争後には十四、五軒の加入者がいたという)、祭り当日には当番(一年交替)宅の門口に山の神講の幟を立て、朝、当番が山の神祠に参って神酒などを供え、午後から講員が当番宅に集まって酒盛りをしている(最近では祠の前で酒盛りをする)。講はこれだけであるが、山ごとに山主の招待で従業員が料理屋で一パイ飲み、祝い品をもらう

ことは行なわれ、山林業従事者の楽しみの日になっている。

なお、山の神の中には、次のような祀り始めの伝承を持っているものがある。すなわち、かつてある人が山に入ったところ、白髪のヒヒ猿に会い、恐怖のために背筋が寒くなり、身体が固くなつて動くことができなくなった。目の前のヒヒ猿は山の神の化身に違いないと思ひ、山を下りたら山の神を祀ると念じつつようやく下山することができた。そして、早速、祠を設け山の神を祀つたのだという。

十一月二十三日 新嘗祭

新嘗祭とは称しながらも、大漁祈願祭の趣旨で祭りを行なっているという。共同組合の主催である。

午前十時から九木神社において祭典を行ない、そのあと、神官、共同組合の役員、村組、配役、九鬼の各種団体の長らが、供えてあつた白酒(下ブロック)を飲みあう。白酒は自家醸造のものでなく、取り寄せたものである。

十二月二十二日 冬至

各家ではカボチャを煮て食べるが、これを食べると中風にならないと言われている。また、最近では、柚子を売りに来るようになり、柚子湯に入るようにもなった。

行事の支持母体

九鬼の年中行事を、行なう人々を基準にして、(1) 家単位の行事、(2) 有志による行事、(3) ムラの行事に分類し、その特徴を考えてみたい。

(1) 家単位の行事

九鬼のほとんど全部の家で行なわれてはいるが、執行主体があくまで個々の家であるものは、ムラの行事とは言えない。このような家単位の行事には次のようなものがある。

煤払い 餅搗き 屋内の正月飾り 暮の寺参り・墓参り 若水迎え 初詣 正月の屋内の神祭り
七草 鏡開き 小豆粥 一月十六日の寺参り・墓参り 節分 八鬼山荒神参り 年祝い・厄落とし
三月節供 春秋彼岸の諸行事 卯月八日 五月節供 半夏生 七夕 盆の寺参り・墓参り 盆のオ
シヨウロ・ホツカイシヨウロ祭り 初盆行事 盆踊り 八朔 八月十五夜 九月節供 十月亥の子
冬至

これらは、八鬼山の荒神参りと年祝い・厄落としを除けば、ほぼ全国共通に営まれているものである。行事内容も際だって異なるものではない。逆に、全国的に多い正月の家ごとの仕事始めや予祝・

年占の行事が稀薄である。これらには農耕儀礼の年中行事化したものが多いのだから、生業が農耕中心でなかった九鬼で行なわれていないのは、当然のことだと言えよう。

(2) 有志による行事

何らかの信仰を同じくする者や生業をともにする者が、共同で執行する行事には、次のようなものがある。

地藏講 大師講 山の神祭り 漁始め 八鬼山荒神参り 浦祈禱

非常に少ないことがわかる。ごく一部の女性たちによって支持されているだけの地藏講や大師講、それに、一部の山地主と山仕事に従事する人々による山の神祭りを除けば、九鬼には信仰的講行事が存在しないことになる。一人(二軒)が幾種類もの講に参加しているほどの多くの講が組織され、それらが毎月か数ヶ月おきに間歇的に営まれているような所とは、九鬼の場合年中行事のあり方は異なっていると言えよう。

八鬼山荒神祭りには個々の家でも参るが、鰯大敷網では網頭が皆を代表して大漁を祈願しに出かける。漁始め・浦祈禱とともに共同組合の行事であるため、これらはムラの行事に含めるのが適当かもしれないが、浦祈禱が最近漁業協同組合の主権になったことからわかるように、いずれも漁撈に従事する人々の行事であるとの意識が強いため、ここに分類した。もしこれらをムラの行事に含めると、

九鬼には有志による行事がいよいよ少ないことになる。

(3) ムラの行事

九鬼の家々すべてが参加する資格を持ち、九鬼という組織が執行主体となるのがムラの行事である。また、町内会と同機能を持つ共同組合が関与する行事も、ムラの行事だと規定してもよいだろう。それには次のようなものがある。

各神社への正月飾り ヒョウケンギョウ(火祭り) 正月の神楽の祓い 船上神楽 ニラクラでの相撲 九木神社正月祭礼と禱屋を中心としての諸準備 伊勢神宮代参 岬神社祭礼 春秋彼岸の年忌法要 招魂祭 九木神社例大祭 盆の施餓鬼・浜施餓鬼 盆踊り 百万遍念仏 敬老会 神送り・神迎え 新嘗祭

正月と盆に集中し、神社や寺を中心とした諸行事にムラの行事の多いことがわかる。船上神楽や伊勢神宮代参、春秋彼岸の年忌法要、百万遍念仏、神送り・神迎えなどは、本来は家単位の行事か有志による行事の性格の強いものである。先に、家単位の行事に予祝・年占的性格のものが稀薄である旨述べたが、九木神社正月祭礼の弓神事はまさしく年占であり、予祝の方ともかくとして、年占目的の行事はムラの方の行事の方に強く表われていると言えよう。九鬼の場合には、大きな財産を持つ共同組合が、その収入を家々に還元する意味もあって、組合員すべてが氏子である九木神社と他の諸社、お

よび組合員すべてが檀家である真巖寺に関わる行事の多くに費用負担をし、ムラの行事に取り込んでしまっている。人々もそれを当然のことと考えている。このようなわけで、ムラの行事が多数にのぼっているのである。

以上、九鬼の年中行事を支持母体別に分けて、傾向を探ってみた。その結果、有志による行事が極端に少なく、ほとんどすべては家々を単位にするものか、九鬼全体に関わるものかの、どちらかであることがわかった。四百四十四もの多数の世帯がありながら、これらすべてが関わるムラの行事の多いことが、大きな特徴だと言うことができる。

九鬼年中行事の構成と特徴

(1) 年中行事の構成

年中行事は、行事相互間の関わりに基準を置けば、A・一年を単位として継承・循環するもの、B・一年を両分し六ヵ月を隔てて対置するもの、C・間歇的に同じ内容が繰り返されるもの、D・他と特別な関係を持たずに孤立して存在しているもの、の四つに分類することができる。冒頭に述べたように、年間三百六十五日に雑然と配置されているかのごとき年中行事も、このように整理してみれば構成原則がよく理解できるのである。

それでは、縷々事例を説明してきた九鬼年中行事の場合は、どうであろうか。

Aの行事とは、その行事が他の月日の行事と密接な関わりを保ちながら営まれていて、それだけ行事の完結性・独立性は薄く、関連する他の月日の行事とセットにして初めて意味の理解可能となるものである。九鬼の行事の中では、九月二十四日の神送りりと十月二十四日の神迎えがこれに該当する。九月二十四日の神送りだけでは完結せず、それを受け継ぐ神迎えとセットになって一つの意味を持つ行事になっているのである。他では、わずかに十月亥の子の行事や山の神祭り、新嘗祭がこの範疇に入ると言えようが、亥の子は春秋のが揃っているわけではなく、山の神祭りも神去来の伝承があるわけではない。また新嘗祭は本来の稲の収穫的要素がほとんど見られず、九鬼の年中行事には継承・循環的性格は稀薄である。

Bは、個々の行事は内容的に完結しているが、一年間の行事の配置構成上あたかも一年を両分するかのように他の何らかの行事と六ヵ月を隔てて対置しており、行なう趣旨においても双方には類似性を認めることができるものである。代表的なものは正月と盆であるが、春秋の彼岸もこれに該当する。全国的に多い二月一日と八月一日、六月一日と十二月一日の対置は九鬼には見られないが、正月行事と盆行事の豊富さと熱心な営まれ方から考えて、Bの行事が九鬼の年中行事に占めるウェイトは重いと見えよう。

Cは、年に何回か月を違えて定期的に繰り返される同種の行事で、九鬼の場合には地藏講や大師講

がこれに該当する。しかしすでに指摘したように、これらは一部の女性有志の間で行なわれているにすぎず、九鬼の年中行事全体の中には軽少な地位しか与えることができない。一般に多くの日待・月待やそれと関連深い信仰的講行事はCに属するもので、全国にはこれらをいくつも熱心に営んでいる所が少なくないのに、九鬼では右の地藏講・大師講を除いてはそれらしきものがない。

Dは、他のものに比べて内容的に完結性・独立性が強く、配置・構成の上から見ても他とほとんど関連を有しない行事である。九鬼の場合には、漁始め、節分、三月節供、卯月八日、浦祈禱、半夏生、七夕、八月十五夜、九月節供、冬至等々で、多くのものがこれに含まれる。

以上の整理によって、九鬼の年中行事は正月と盆の諸行事、および節分やいわゆる五節供など他と特別な関係を持たずに行なわれる諸行事によって成り立っていることがわかった。継承・循環するものや間歇的に繰り返されるものはわずかしがなく、九鬼の年中行事は、数や人々の熱意とは別に、その構成は比較的単純であると言うことができよう。

(2) 正月と盆

最後に、年中行事の中に大きなウェイトを占める正月と盆の構成について考えておきたい。

正月行事には各家々を支持母体とするものと、九鬼全体を支持母体とするものがある。前者は暮の煤払いや船・屋内の神々への正月飾りという準備を経、元旦早暁の若水迎えから始まり一月十五日

で終わる。その間でも、三ヶ日過ぎれば出漁しケ(麩)の生活に戻っているが、屋内の神々への飾りは十五日まで続けられており、寺参り・墓参りもこの日までは行なわず、葬式を出すこともできないことから、十五日までを正月の期間と考えていることがわかる。そしてこの間に、七草や鏡開きなどの行事、還暦や米寿などの祝いごとが行なわれている。ただ、全国的に多い小正月の子祝行事はほとんど見られない。

後者の九鬼全体を支持母体とするものは、九木神社の正月祭りがそれで、十二月十五日の正月飾りハヤシに準備がなされ三十日に飾りつけをしたあと、大晦日から始められ、一月五日の的射にクライマックスを迎え、翌日の総勘定ですべてが終了している。複雑な構成をとる正月祭りは、次の三つの行事の複合したものだと思われる。一つは、九木神社と鎮守社の神を祭り禰屋組織(現在は崩れている)に支えられた行事で、両配對抗の形で進められる。これの中心は、村組を含めた配役と禰人、それにカギトリが精進潔斎をし神人共食を繰り返しながら、最後に的射によって神意を伺おうとするものである。的射の結果は、その年の九鬼の豊漁・安寧にかかわると信じられ、厳粛に進められている。二つめは、大晦日から元旦にかけて行なわれるニラクラでの火祭りと同様である。三つめは、神楽獅子舞いによる魚網・船・家に対する祓いの行事である。二つめと三つめのは、現在では配役・禰人たちが関与し九木神社と鎮守社とも結合して正月祭りの一部に組み込まれているが、執行主体はあくまでも子供組および青年たちであり、行なう趣旨も異なることから、本来は別の行事であったと考えて

よいだろう。

このように正月は、家の行事もムラの行事も大正月中心に成り立っており、小正月には行事が少ない。全国的にみて小正月行事には農耕儀礼の年中行事化したものが多いが、九鬼は漁村であるために十五日までを正月と考えながらも、やはり元来この種のもものが稀薄であったのだろう。

盆の期間は、一応八月一日から二十日までだと考えられる。この間は寺に仏旗が掲げられ、葬式を出すことが遠慮され、一般の日々とは異なる日だとする認識がある。この点、正月の一日から十五日までの期間と酷似している。

盆行事にも、各家々を支持母体にするものと、九鬼全体を支持母体にするものがある。前者の場合、新盆の家と他の盆の家とでは行事の営み方や人々の心の持ち方に相違が見られ、正月より複雑である。新盆の家のショウロ祭りは七日から十五日まで、一般の家のは十三日から十五日までで、十五日深更もしくは十六日早晩にショウロを海上に送り出し、十六日になると墓の供花も平常に戻し仏壇も閉じる。したがって盆をショウロ送りそのものだと規定すれば、盆の期間はの間だけだと考えることもできないわけではない。

九鬼全体を支持母体とするものの代表は、真巖寺で執行される各種施餓鬼会である。浜施餓鬼を含めて三日間に四回もの施餓鬼が、いずれも共同組合主催で行なわれている。正月に家々の神祭りとムラの行事としての九木神社中心の正月祭りが大晦日から五日まで併行して行なわれているのと、十三

日から十五日にかけては家々のショウロ祭りともう行事としての施餓鬼が併行して行なわれているのは、相似している。

このほか正月と盆は、しばしば言われるような年神棚・盆棚、松迎え・盆花迎え、正月礼・盆礼、(小)正月の火祭り・盆の火等々多くの点で類似が認められる。

全国的に見た場合、多くの類似点を持つ正月と盆の行事の中で際だった相違点は、農耕儀礼の年中行事化した小正月の予祝・年占的諸行事と同性格のものが盆にはほとんど見られないということである。しかし九鬼の場合には、すでに見たとおりその小正月の諸行事が稀薄であるために、正月と盆の相違点が少なく、結果的に正月と盆の類似点が目立つことになっているのである。

小稿をなすにあたり、次の方々にお世話になった。芳名を記し感謝の意を表します。(順不同、敬称略)

稲葉門治 稲葉輝郎 岡本龍一 尾崎進 尾崎民郎 東暉人 加藤熊太郎 川上石右衛門 川上英樹 川上正資 川上正義 川上教一 川上克己 川上虎之助 川上つむ 北村欽一 田村ちゑ 出口いしゑ 三諾純雄
三浦昇 宮崎浄 宮崎性弥 森下千美 宮崎勝太郎 若林慶郎 昭和六十年年度村組・配役・禱人 共同組合職員

その他失礼ながらお名前をうかがい忘れた方もあり、多くの方々のお世話になった。

- (1) 拙稿「年中行事の構造」『暦と祭事（日本民俗文化大系・9）』小学館 昭和59年10月。
- (2) 井田安雄「年中行事」『日本民俗学（特集・日本民俗学の研究動向 昭和58・59年）』一六〇号 波平恵美子『ケガレ』東京堂出版 昭和60年9月。
- (3) 昭和五十七年八月に、当時の成城大学文芸学部の文化史ゼミナール（田中担当）を受講した学生諸君と当地を訪れ、人情と興味ある民俗に心ひかれた。現在、その時参加した小林稔・黒川敏彦両君と九鬼の民俗誌作成のため、民俗調査を継続中である。
- (4) 『尾鷲市史・下』三重県尾鷲市役所 昭和46年5月 八八ページ。
- (5) 『尾鷲市史・上』三重県尾鷲市役所 昭和44年6月 六九四ページ。
- (6) 尾鷲市企画財政課広報統計係『昭和六十年国勢調査（地区別集計概数）』昭和61年6月、による。
- (7) 九木浦戸長役場『紀伊国北牟婁郡九木浦地誌』（稿本）明治17年10月。現在、この稿本は九鬼町公民館に保管されている。
- (8) 河岡武春「定置網漁村の漁業生産と土地制度——尾鷲市九木浦の実態」『漁業経済研究』一五—三・四 第11表による。
- (9) 注(6)に同じ。
- (10) 共同組合については、管見のおよぶ限り、注(8)河岡氏論文のほか、北村正樹・福田彰信・平井美登里「三重県尾鷲市九木浦における入会権の社会調査——山と海との入会の実態」『学生法学』（甲南大学法学大会）がある。
- (11) 注(7)に同じ。
- (12) 九木神社境内に、宝暦十四年（一七六四）正月吉日に「九木浦鯨方勤人中」が奉納した灯籠がある。
- (13) 注(7)に同じ。

- (14) 共同組合には、「九木浦共同組合・配役人禱屋年中行事」という書類があり、正月祭礼はこれに基づいて準備され執行されている。これによって、以下、頭屋・当屋ではなく禱屋あるいは禱人の表記を用いる。
- (15) 大師堂の開創について、次のような伝承がある。この大師像は、尾崎民郎氏の先祖和蔵が、嘉永年間（二八四八〜一八五四）、四国八十八ヶ所霊場のうちの二十番鶴林寺から背負って帰ったものである。なぜそのようにしたかというところ——当時、某財産家宅に盗人が入って金銭が盗まれた。その日は、九鬼に芝居が巡業に来、皆が観に行つてどの家々も留守になった。その時、人通りのない道を和蔵だけが歩いていたら、風呂屋をしていた和蔵だけが火の番のため在宅していたとかいう理由で、和蔵に泥棒の嫌疑がかけられた。その無念さに和蔵は出奔してしまつた（出奔後真犯人は捕えられた）。そして、家人は死んだものとあきらめていたが、十年ほど後に、和蔵は髻ぼうぼうの姿で大師を背負つて九鬼に戻つてきたのである。和蔵が言うには、西国・四国を巡礼したあと、鶴林寺にしばらく住み込んで働いていたが、そこで住職に見込まれ、鶴林寺に余つていた大師像を譲られたので、背負つて来たのだと。そして和蔵が、現在地（ここは和蔵の親戚宅の畑だった）に小さな堂を建立し、その大師を祀つた。和蔵は間もなく安政年間（一八五四〜一八六〇）に亡くなり、その娘ゆかはこの堂をよく守り続けることができず、真巖寺に差し出した。以後、真巖寺持となったのである。さらに明治四十年ごろ、人々の協力で現在と同じ規模の大きな堂になり、太平洋戦争後に大修理して現在の堂になった。昭和四十年ごろまでは堂守がいたというが、今はない。
- なお、九鬼に重病人がでると、その親戚・近所の人々が大師堂に籠り、光明真言を繰ることがあるという。
- (16) 以下、正月五日までの九木神社正月祭礼の準備と執行については、昭和五十九年末から六十年初頭にかけて、私と一緒に調査に訪れた小林稔・黒川敏彦・岩本マサ子君のまとめた『昭和六〇年度正月祭礼報告』（稿本）を参考にした。また、写真2〜8は岩本君撮影のものである。
- (17) ニラクラとは、真巖寺の南真下にある十坪ほどの三角形の空地である。周囲には高さ一メートルほどの石垣が築かれており、その一隅に幅一メートルほどの入口が設けられている。九鬼ではウニ（雲丹）のことをニナと言うが、ニラクラのニラはこのニナと関係がある言葉だという。そしてニラクラには次のような伝

承がある。このあたり一帯はかつては海であつて、大きなニナ（ウニ）が住んでいた。ニナは時々漁師の足をつくので、困った漁師たちが、和尚の指示でニナを全部取り殺してしまい、その後、その場所を埋め立ててしまった。そして殺したニナの祟りを恐れ、その霊を供養するためにヒョウケンギョウの行事を始めたのだという。（『尾鷲市史・上』八二二ページ）

(18) 以下、本文中でも触れるが、盆期間中に真巖寺で行なわれる行事のうち、ムラ人と直接関わるものには次のようなものがある。

八月一日 仏旗を掲げる。

八月七日 本堂正面に施餓鬼棚を組む。

八月十三日〜十五日 午後一時から施餓鬼会。寺側の説明によると、十三日のは九鬼家先祖のための施餓鬼

十四日のは一般檀家のための施餓鬼、十五日のは万人講諸精霊・三界万霊・魚族供養の施餓鬼だという。

別に、十四日午前十時から戦没者の追悼法要が営まれ、十五日夜遅くには海岸で浜施餓鬼が行なわれる。

八月十六日 百万遍念仏。

八月二十日 仏旗を下ろす。

(19) 九鬼では位牌は二つ準備され、家の仏壇と真巖寺内の位牌堂と同じものが祀られている。

(20) 九鬼には、念仏のお婆さんと呼ばれる人が現在三人いる（竹内みちよ・田村ちえ・川上梅子の各嬭）。

これらの人は、次のような決められた日に各家々を訪れ、西国三十三番の札所の名を曲節をつけて歌い、亡くなった人の霊を弔っている。このことを念仏をすと言っている。

○不祝儀の際 死者があると、その家から連絡を受けるので行き、火葬の前に念仏を唱え、葬式後の夕飯時にもその家へ行って念仏を唱える。（九鬼では、現在、死者が出るとまず茶毘にふしてから、翌日に葬式をすることが多い。ただし土葬のころには、通夜をし、その翌日に葬儀を営んでから埋葬した。そのころには、通夜の時と埋葬後の二回、喪家へ行って念仏を唱えていた。）

○ムカワリ ムカワリとは一周忌のこと。その家を訪れる。

○初盆の時 盆の十三・十四・十五日のうちに、初盆の家々を念仏に廻る。
○彼岸 春秋の彼岸には、その前半年間に年忌に当たっていた家を訪れて念仏を唱える。これは招かれた家のみに行くのである。

右とは別に、春秋の彼岸の明けの日と盆の十六日には、年寄り有志とともに寺の本堂で念仏を唱える。

(21) 宮の谷の山の神講には、山の神の掛軸(一)、幟(二)、帳面(四)があり、箱の中に納められて当番の家に順々に廻されている。参考までに、それらについて若干説明しておきたい。

○掛軸について——A・B二つある。Aには、表に「山の神」と記され、山の神の絵像が描かれている。裏には「大正二年霜月宿 尾崎半次郎寄附之」と記されている。Bには、表に山の神の絵像が描かれ、裏に「昭和四十年十一月七日求之 山の神講」と記されている。

○幟について——H・I二対ある。Hには、ともに「奉納 山祇神 山神講」と記されている。Iには、ともに「奉納 大山祇神 九鬼森林組合」と記されている。

○帳面について——P・Q・R・S四冊ある。Pには、表紙に「明治十二歳 山神講中帳」と記され、裏表紙に「山神講初宿 加藤政右衛門」とある。内容を見ると、当村八名の講員がいたこと、講の費用として一回計二十五銭かかったので一人三銭二厘ずつ負担していたこと、それらを酒・半紙・餅などの代金にあてていたことがわかる。Qの表紙は破損しているが、裏表紙には「明治二拾老年 組合中 子正月吉辰 造之」と記されている。内容は、明治二十一年から同二十九年までのことが記され、二十九年には講員が十一人にまでふえ、一人四銭二厘ずつ負担していたことがわかる。Rには、表紙に「明治四十一年正月初日山神講中帳」と記され、裏表紙には「山神初宿 尾崎浅五郎」とある。内容は、明治四十一年から昭和七年までの宿をつとめた家の名が記されている。Sは昭和四十九年十一月七日の記録で、講員が十二人いたこと、当日はそのうち二人が欠席したこと、会費は一人宛千五百円でそのうち五百円を積立にまわしたことがわかる。